

記念誌発行に際して

神の慈しみと
憐れみの中で

白根新治（金沢文庫教会牧師）



親子の絆を静かに語って、大反響を呼んでいる絵本がある。アメリカで出版された「ラヴ・ユー・フォーエヴァー」である。作者は物語作家として知られるロバート・マンチで、現在全米で 1580 万部を突破し、超ベストセラー、ロングセラーとなっている。

アイ・ラヴ・ユー いつまでも
アイ・ラヴ・ユー どんなときも
わたしが生きているかぎり
あなたはずっとわたしの赤ちゃん

生まれたばかりの赤ちゃんの時も、忙しく動き回るようになった時も、そろそろ反抗期という 9 歳の時も、母は子供を抱きしめ、愛を込めて歌う。

怪しげな服を身に着け、問題のありそうな友達と付き合い、奇妙な音楽を聴くようになった時も、母はベッドで眠る我が子を抱きしめ、相も変わらずこの歌をうたう。

やがて歳月は流れて、年老いた母は息子の家を訪ねることもできなくなる。そうすると電話をかけてうたって聴かせる。

ある日、息子が母の家を訪ねる。いつもの歌が聞こえる。と、途中でそれは止まる。母にはもう最後までうたう体力がなかったのだ。それを見て今度は息子が母を抱いてうたう。

アイ・ラヴ・ユー いつまでも
アイ・ラヴ・ユー どんなときも
ぼくの生きているかぎり
あなたはずっとぼくのお母さん

息子は自分の家へ戻る。そして生まれたばかりの女の子を抱っこしてうたう。

アイ・ラヴ・ユー いつまでも
アイ・ラヴ・ユー どんなときも
ぼくの生きているかぎり
おまえはずっとぼくの赤ちゃん

これは日本でも翻訳出版されていて、育児に疲れた母親を癒す一冊としてベストセラーになっている。「福音」が基だという絵本が世界中に広まってゆくというのは驚くべきことといえるだろう。

それは学校の聖書の授業中だった。「日曜日には教会に行くように」という私に子供たちから「金沢文庫には教会がありません」という声が返って来た。今から56年前のことである。

その夜、牧師の娘として育った妻と相談して、新築したばかりの我が家の一室を教会学校として使っていただくということになった。これが「祈りの家」の手狭な場所でのスタートである。爾来、「祈りの家」は「伝道所」となり「教会」となって現在に至っている。

「福音を子供達に」という願いから始まった我が家の7畳の間での集会は、子供達が常時50人ほど集まり、活気に満ちた中で礼拝がもたれ、福音が語られた。多くの先生方がかわるがわる出席して、力強いメッセージを下さった。聞く子供達も真剣そのものだった。

当時、関東学院大学神学部教授であられたフロップ博士、短期大学のブラックウェル先生、捜真女学院のデュパキエ先生というように次々と懐かしいお顔と名前が浮かんでくる。現在聖職者として立派な働きをされている先生方からも、そのお若い頃、言い尽くし得ないお力添えを頂戴した。お礼の言葉もない思いである。

この時に「金沢文庫教会」の基礎が形作られ、揺るぎないものとしてここに至っていることを思うと、絵本「Love You Forever」の上に起こった驚くべきことが、あの7畳の部屋の上にも確かに起こっていたのだと思わせられて目頭が熱くなる。もしそうであるとすればこの「驚くべきこと」は、神の恵と多くの方々からの御支援とによってその後もずっと続き、現在に至っているということになるのであろう。

この度の「文庫教会56年の歩み」発行という望外の喜びに際しても、多くの方々から玉稿を賜った。今日に至るまでこの小さき教会にお心を寄せて下さったすべての方々から心からのお礼を申し上げたいと思う。

この長きに亘る年月を、ただ神の慈しみと憐れみの中にいたとしか言いようのない者として申し上げることがあるとすれば、それは「感謝」の一言のみである。

お祝いと励ましのお言葉

派遣される教会へ

森島 牧人（関東学院 学院長）



創立 56 周年を迎えられる金沢文庫教会の皆様、誠におめでとうございます。主は、金沢文庫の地に白根新治先生を牧者としてお立てになり、福音の種をまく場として「金沢祈りの家」を興され、これまでの長きに亘り牧者とその群れを祝し、支え、導いてこられました。いま金沢文庫教会の 56 年にも亘る宣教の歩みを覚えるとき、主のみ名を賛美するものであります。

その群れの牧者であった白根先生は、ご自宅を開放してこの宣教の業を始められました。その決意に敬服するとともに、先生の献身の姿勢を側面から支えられたご家族のお働きは、並大抵のものではなかったであろうと拝察いたします。また白根先生は、学校法人関東学院において、六浦中学高等学校の聖書科教師、宗教主任、また三春台の小学校の校長等々、学院の中での要職を歴任された先生であります。つまり学校教師の職を全うしての牧会活動でありました。このことは、日本におけるキリスト教宣教を考える時、とても大きな意味があります。ザビエルが日本にキリスト教を伝えたのは、1549 年です。それから随分の年月が経過していますが、日本のキリスト者の数は、未だ総人口の 1% にも達しません。それに比べ、多くの先達たちの努力と苦勞により日本社会に根付いたキリスト教学校の働きには、大きなものがあります。キリストの教えに触れた数多くの有能な若者を社会に送り続けています。現在、関東学院は、プロテスタント系キリスト教学校の中でも五番目の規模を誇ります。

関東学院に奉職した宗教主任たちの在り方は、初代院長坂田 祐先生が書した「人になれ 奉仕せよ その土台はイエス・キリスト也」との学院の建学の精神の下、まさに自分自身も学んだ母校関東学院から「地域社会へ派遣された」との各人の召命観を具現化するものであります。その意味で、この地で伝道者としての第一歩を歩みだした私にとっては、白根先生と金沢文庫伝道所は、常に自分の在り方、生き方を考えるうえでの原点であります。

いま述べましたように、日本においては、どの教会においても教会員の多くは

何らかの意味でキリスト教学校に関係しています。また、同窓会等で卒業生の方々に、「在学中のことで何が一番心に残っていますか？」と問うと、「それは礼拝！」という答えが返ってきます。そして一様に、「当時は面倒くさいと思っていたのになー！」と付け加えます。私はそのやり取りの中に、キリスト教学校の先生方の並々ならぬご苦勞を覚えるとともに、訓令12号下での中学関東学院設立への決意や、たとえ戦時中であっても礼拝を中断することのなかったその姿勢に示される、関東学院の気概を感じるのであります。

さて、当時まだバスの路線の無かった時代、礼拝はまさに山登りでした。教会員は毎週、週の初めの朝、この「夏山」を目指し集まってきます。「定期的に集う」このことに、何の意味があるのでしょうか。

私事で恐縮ですが、私は横浜の港の近くで生まれました。足の弱かった私を氣遣ってか、母は毎日私に革靴をしっかりと履かせ、山手の石畳をまっすぐ歩くように命じました。もちろん幼い私にそれは苦痛な体験でしたが、小高い丘から望む港の景色は格別でした。海への憧れはその当時につくられたものかも知れません。私は、一つの不思議なことを発見しました。外国航路船は、面白いことに、埠頭を離れてもまっすぐ港の外へ向かわないのです。港の中をゆっくり一周し、それからおもむろに港を出ていきます。幼心にも疑問を感じた私は、近所に住む船乗り尋ねてみました。

現在であれば、私たちは地球上のどこにあっても人工衛星からのデータで自分の位置を即座に知ることが出来ます。しかし少し前までは大海原を走るどの船もみな、コンパスに頼って航海していました。ですからもしその針が1度でも狂っていたら大変なのです。アメリカ行が、インドに着いてしまうかも知れません。そこで船乗りたちは荒海に出る前に、静かな港の中で、その船の針が正しく北を指しているかどうか、地上の目標物をもとに確かめているのです。私たちも同じです。歩むべき道を誤らないように、先ず私たちの心のコンパスが正しくイエス・キリストを指しているかどうかを確かめなければなりません。このことをおろそかにして危険なこの世界に飛び出していくことは無謀だからです。ここに、毎週「定期的に集う」ことの、礼拝の意味があります。

ある有名な登山家が、「あなたはなぜ山に登るのですか？」との問いに、「それは下るためです。大切なことは、愛する者のもとへ戻ることです。」と答えました。山登りにも上りと下りがあるように、礼拝にも上りと下りがあるのです。アブラハムもモーセも、主イエスご自身も度々山に登られました。そこが神の言葉と出会う場だからです。週の初めの日に、共に主の山に登り集う私たちの群れの直中に、主は居られます。私たちの心のコンパスを正しい方向へと整えてくださる主は、私たちに聖霊の息吹を注いで下さいます。私たちは、主から派遣されるのです。それ故、私たちは礼拝に集い来ることだけを誇ることはできません。その山

で出会ったお方が真の愛の神であるならば、その愛と共に山を下らねばなりません。麓にはその愛を必要とする多くの者がいるからです。

毎週「夏山」に登ってくることは意味があります。私たちはそこで信仰のコンパスの針を合わせ、正しい方向性をもって、「派遣される者」に変えられるのです。家庭に、職場に、地域社会へと。共に主の山に登るものは、主と共に山を下りましょう。金沢文庫教会の働きの上に、主の豊かな御祝福がありますようにお祈り申し上げます。

56周年おめでとうございます

日本バプテスト同盟理事長

山本 富二（磯子の丘教会牧師）



金沢文庫教会56周年おめでとうございます。半世紀以上、長年にわたります伝道活動を感謝致します。

白根新治先生が横浜で伝道する前、灼熱の中で、苦しみながら伝道なさったことを伺ったことがあります。先生の伝道への熱心さは、関東学院の教師となっても変わりませんでした。教師をしながら金沢文庫教会の働きを始められました。

私は浦島太郎です。金沢文庫教会を始められた頃と現在しか知りません。41年間関西に居ました。中間は全く存じ上げません。友人の大井人先生との交わりの中から垣間見ただけです。

私は大井先生を人（じん）ちゃん、人ちゃんは私を太郎ちゃんと言いました。まさに（浦島）太郎なのです。

1958年（昭和33年）頃、横浜はやっと戦争後の復興を始めた時でした。沢山の不足、不便さそして、粗末な面がありました。新しいものが出来ても、それは外国製品のコピーと言われ、欠陥品が多かったのです。

そのような時代の中にもキリスト教活動は盛んでした。賀川豊彦、木村清松、スタンレー ジョンズなどの伝道集会在しばしば持たれました。そのたびにビラ配りがあり、私も参加しました。どの集会も盛況でした。

私はその頃、貧しさの中から働かざるを得ず、自動車会社の人となりました。昼休みはどこからともなく人々が私の所に集まり、聖書を読むことが始まりました。また、若造の私に多くの大人が聖書の言葉について尋ねてくることには困りました。

一方でキリスト教活動が盛んで、もう一方で人々がキリスト教に関心を持ち、その両者の思いは一つとなり、バプテスト横浜教会は多くの人で溢れていました。そんな中に金沢文庫教会は始まりました。また続けられました。

浦島太郎は横浜を離れました。

今日、50年前とは全く時代が変わりました。また、横浜は日本の中心地の一つとしてどんどん変化しています。50年前と比べますと、生活環境は全く良くなりました。また、充分すぎるくらいに満たされています。しかし、本質的なものが欠けている時代になってしまいました。人々の中に不満が潜み、不足を感じ、心が痛み、それを助ける人を捜せないでいます。外側は良くなっているのに、心の中までは入り難い時代になりました。そして、多くの人々が助けを求めているのです。

教会の働きも静かになりました。各教会は熱心に働きをしています。教会に集う人々も何とかしなければと努力を重ねています。私は2013年のある1か月間に約1000人以上の人々に語る機会が与えられました。預言者たちのように荒野に出て強くは語りませんでした。またバプテストのヨハネのように「主の道を整え、その道をまっすぐにせよ」「蝮の子らよ、差し迫った神の怒りを免れるとだれが教えたのか。悔い改めにふさわしい実を結べ」と激しくは語りませんでした。激しくなくても熱心に語ったつもりです。しかし、助けを求めている人々に福音の喜びが届かないのです。

今日、人々と私たち信仰者たちとの間にミスマッチがあります。キリスト教学校の聖書を語る時間と経費は膨大なものです。

今日の時代に私たちは共に祈り、信仰者の側の多くの違いの中にも共に働かなければなりません。私たちのために十字架に掛り、身代わりになり、一切を赦して下さったイエスさまは、今も生きて働いて下さっていることを強く受け止めなければなりません。そして、もう一歩前に歩み出したいものです。

未だに浦島太郎でないことを願っています。

一人の幼な子との出会い

北 條 昇 (練馬信愛教会牧師)



ある年の7月、浅間高原で、関東学院六浦高校生の夏期修養会がもたれました。そこにわたしが講師として招かれたのです。白根先生にお会いしたのはそれが初めてで、聖書科の教師として、元気いっぱいの大井 人先生にお目にかかったのもその時です。その後、白根先生が、新しい教会の会堂を建てるために、古新聞を回収しておられることを知りました。教会建設の為に、こまめに労される白根先生の姿に、深い感銘を受けました。

文庫教会が完成してからは、礼拝や、夏期修養会に講師として幾度かお招きを受け、信徒の方々の暖かな交わりに加えさせていただきました。この度金沢文庫教会が創立56周年を迎えられることに、心からお祝いを申し上げます。文庫教会が築かれた素晴らしい福音宣教の歴史の上に、さらに一層のご発展を心からお祈りいたします。

わたしたちの練馬信愛教会の会堂が落成したのは、1966年の7月のことです。実は、この4年前、62年に発足した茗荷谷キリスト教会(東京都文京区)は、宣教師館を集会所として使っていたことから早急に立ち退かねばなくなりました。引越し先を探し求め、やっと購入することができたのは、練馬区にあった農地で、そこに4年後に礼拝堂と牧師住居が完成しました。ところが、会堂は建てられたものの、文京区の茗荷谷教会を支えていた会員たちは、会堂が完成してから数か月後には、足が遠のき、数名を残すのみとなってしまいました。茗荷谷教会の移転は名実が伴わず、わたしたち夫婦は3歳の長男を抱え、未知の土地で味方の援助のない「孤軍」のように、厳しい開拓伝道の現実に立たされたのです。

そんな中で、私たちに将来への希望を与えてくれたのは、子どもたちでした。教会建設のための土地が与えられてからは、その敷地に天幕を張り、そこに毎日曜日、子どもたちの集まりを持つことにしました。物珍しさに集まる子どもたちが増えて10数名になり、7月の会堂の新築を一番喜んでくれたのはこれらの地元の子どもたちでした。やがて子供たちのための英語教室や野球チームが誕生し、子どもたちを通しての教会学校の働きが広げられる一方、家内は自分たちの息子と同年齢の幼児たちへの「幼児園」の開設に踏み切りました。集まった幼児は3人で、地域の幼稚園に行くことのできない子どもたちでした。そしてこれらの子どもたちを持った母親には、「生け花教室」がもたれました。こうして、教会の礼拝や諸行事には、地域の婦人たちが参加するようになったのです。

教会会堂ができてから 7,8 年経ち、教会活動がまとまり、「幼稚園」には 15,6 人の園児をお預かりするようになりました。そんなある雨降りの午後、母親に連れられて、一人の幼児が教会の玄関の前に立っていました。【この子をぜひ入園させてほしい】と、必死に助けを求めて嘆願する母親。あちらこちらの幼稚園や施設を尋ねたものの、その願いは聞き入れられず、わたしたちの園にやってこられたのです。黄色い雨合羽を着た 3 歳ぐらいの息子は、やっと身体を支えながら、大きな目を開き、わたしたちに何かをうったえるようでした。これが「けんちゃん」(K 君)でした。K 君は、何万人に一人という、新陳代謝の奇病を持って生まれました。言葉を話すどころか、呼吸することが困難なために、口は半ば開いたままです。身体は肥満し、倒れたら立ち上がれません。医師の判断では、その生命の寿命は 10 歳位とのことです。【せめて、幼稚園の生活体験をさせてほしい】との、母親の願いです。

K 君が初めて登園してきた日、在園児には、前もって K 君のことが園長から伝えられ、温かく迎えてあげようと、子どもたちは話し合っていました。ところが K 君が部屋に入ったとたん、そのような雰囲気は一変し、園児たちは恐怖に硬直し、部屋の隅へと逃げていったのです。目をむき出し、怖い顔をした K 君のこのような意外な行動は、たちまち園児の母親たちの耳に入りました。そして、数日後には、園長の訴えを聞き入れず、5 人の園児が退園していきました。病気に感染するからの理由です。やっと軌道に乗った「幼稚園」の活動は大きな試練に直面しました。

このことがあってから 10 日ほど経ちました。この時までには、あの初日のショックは子どもたちの間で薄らえ、K 君も自分の席に座るようになっていました。K 君はいつものように鼻水を垂らしながら、美知江先生の話の話を聞いているようでした。すると突然、隣の席に座っていた女の子が、ティッシュで、K 君の鼻水をふき取り始めました。すると K 君の顔がほころび、にっこりと笑ったのです。それは今まで K 君が見せたことのない、平和と喜びに満ちた顔でした。それから、他の子どもたちが次々に席を起って、K 君の鼻水を拭いてあげました。

この日以来、K 君は、クラスの仲間として受け入れられただけでなく、その剽軽さで、クラスの人気者となりました。【イエス様】と、祈る言葉以外は、言葉で表現できなかったのですが、友達を大切にする思いやりは、その後の彼の行動に示されていました。そしていろいろな楽しい思い出を残し、12 歳の生涯を終えました。わたしたちは、この一人の幼な子を通して、イエス様が語られた、「わたしの兄弟であるこれらのもっとも小さいものの一人にしたのは、わたしにしたのである」(マタイ 25:40)とのみ言葉を思い起こし、わたしたちが果たすべき教育の業の原点を、幼な子たちから教えられました。

その後、バプテスマを受けられた K 君のお母さんは、日本バプテスト連盟の牧師となって活躍しておられます。

祝 金沢文庫教会 56周年

加納 政 弘（関東学院教会元牧師）



御教会が「金沢祈りの家」として発足以来 56 年間、伝道活動を続けてこられたことは誠に驚きであり、これは白根新治牧師はじめ、信徒の方々のたゆまざる伝道牧会の賜物とお喜び申し上げます。

白根先生は文庫教会の牧師として働かれると同時に六浦キャンパス内の関東学院六浦中高の聖書科の教師として働かれ、奥様も長く六浦小学校の教師として働かれました。

私は同じ六浦キャンパスにあった関東学院大学神学部で教え、その後関東学院教会の牧師も務めたので、同じキャンパス内でしばしば白根先生とお会いし、親しい交わりを与えられました。

白根先生と私の個人的な係わりについて少しだけ語らせて頂きますと、戦後私は新しい生き方を求めて追浜に住んでいた叔母の家に下宿し、そこから立教大学に通っていました。

私が初めて白根先生を遠くから拝見したのは、田浦の社会館で礼拝に参加したときで、礼拝の終りにガウンを着た白根先生が祝祷をなさったのを覚えています。その後関東学院大学に基督教研究所が開設されたとき、関東学院教会の先生方に勧められ、将来バプテストで働く教師を目指して入学しました。当初清水義樹先生が教授として京都バプテスト教会から赴任しておられました。その頃白根先生が清水先生を訪ね、「先生、ご一緒にマルコ伝をギリシャ語で読ませて下さい」と願い出てお二人のギリシャ語聖書講読が始まりました。暫くして、清水先生が加納君もギリシャ語講読に参加しなさいと言われ、私は大急ぎでギリシャ語文法書を独習し参加したものです。お蔭で私はその後独りで残りの新約全巻をギリシャ語で読み、初めてのギリシャ語をノート数冊にまとめることができました。

白根先生は今年で卒寿(90歳)を迎えられ、我々バプテスト同盟の現役の最高年齢者です。私はと言えばこの七月で米寿を迎え、同盟では二番目の高齢教職者であります。

白根先生は小柄の身体ですが、声はとても大きいのに驚きます。学院関係者が毎年12月16日に坂田 祐先生の御命日を記念して墓前礼拝をしております。

ある年の墓前礼拝に私は遅れて参加したので既に礼拝が始まっておりましたが、遠くからでも白根先生のメッセージだと判断できました。

1970年代に入るといわゆる学生運動が激しくなり、神学部は廃部に追い込まれ、私は首になってしまいました。そんな時、関東学院教会は私を専任牧師として迎えて下さいました。当時六浦キャンパスの内は、いわゆる学生運動の拠点とされ、礼拝堂も占拠され、一時祈祷会に使用していた畑の中の小屋で礼拝したこともありましたが、しばらく後に再び神学館で礼拝できるようになりましたが、この紛争のため教会の礼拝出席者は30数名に落ち込んでしまいました。

丁度その頃、学院の短期大学がアメリカンバプテストに英語教師の派遣を要請し、それに応じて **Mrs Rene Sweezey** が遣わされてきました。先生は米国バプテストの牧師夫人としてバイブル・クラスを担当しておられ、ご主人が天に召されたのをきっかけに、短大の要請に応じて来日されたのです。スウィージー先生は短大で教えるかたわら、大学生や短大生のためにバイブル・クラスを開き、私は通訳を務めました。夕方のバイブル・クラスのため先生は女子学生に手伝わせクッキーや時には空腹の学生のため食事さえも用意し、熱心に祈り、聖書を説き明かし、学生たちを信仰の決断へと導かれました。私はその青年たちを教会に迎えバプテスマを授け、7~8年のうちに礼拝出席者は以前と変わらぬ人数に戻ってきました。

そんな時代に、スウィージー先生はイースター早天礼拝を提案され、それがきっかけで聖路教会、金沢文庫教会、関東学院教会が合同のイースター早天祈祷会が順番に開かれるようになり、今日も続けられています。

最後に、大学紛争によって沈滞しがちな教会の教勢を盛り上げようと白根先生が提案され、金沢地区にある超教派の諸教会が合同して伝道集会を計画し、柳町の金沢キリスト教会の牧師室に牧師たちが集まり、計画を立て、著名な伝道者を招いて金沢区役所の大講堂を借りて二回ほど特別伝道集会を開きました。

以上簡単ですが、白根先生の教会創立56周年をお迎えになった記念すべきお喜びの機会に、私と白根先生とのささやかな係わりについて語らせて頂きました。白根先生、これからも主の豊かな祝福のうちに守られて生きていかれるよう、心からお祝いし、お祈り申し上げます。

人は皆自分の中に歴史を読む

名護良健
(沖縄中城城東教会協力牧師)



「56年記念誌」発行される由、おめでとうございます。思えば、今から20年前の御教会と姉妹関係を締結して、これまで白根先生には名誉牧師としてご助力、応援頂きました。ほとんど毎年来県して頂きました。それには当教会の平良節子さんが関東学院神学部時代から文庫教会でお世話になったことも一つの要因でした。私には先輩牧師として大事な方でありました。今は亡き御夫人と共に記憶の中にあります。お蔭様で50年の牧師人生を送ることが出来ました。この3月で主任牧師を若い牧師に委ねることとしました。一つは、健康上の問題です。協力牧師として、これからも若い牧師を助けてまいります。

この教会も戦後間もなく開拓されてから今年65年を迎えました。これを機会に、「65年記念誌」を発行致しました。専任牧師としては私が3代目になります。この教会の歴史のほとんど半分を私が担う光栄に浴したことになります。1960年西南学院に入学、「60年安保」闘争の貴重な体験、1972年には沖縄の「祖国復帰」という歴史的な場面にも遭遇致しました。また文庫教会の皆様のご多大なご支援もあり、新会堂建設も果たしました。いわゆるメガチャーチではありませんが、堅実な教会形成を果たしたと自負しております。これからの教会の未来を心おきなく若い世代に委ねたいと思います。

こうして今振り返りますと、「人は皆自分のなかに歴史を読む」ということが了解されます。文庫教会のこれからのご発展をお祈り申し上げます。神の恵みにただ感謝して。

主の「デイ」に導かれて

澤野 寛 (前高槻キリスト教会牧師)



41年間仕えてきた高槻バプテスト教会を、この3月31日をもって退任し、横浜の地へと越して来ました。霞ヶ丘教会で説教者として隔週に奉仕させていただく事になりましたが、御教会においても時々講壇に立たせていただければと願っております。

私は3代目の牧師です。初代澤野芳太郎、祖父は厚木の農家の長男として出生しましたが、中島力三郎牧師に導かれてキリスト者となり、さらに献身し伝道者となるに及んで、実家から勘当されてしまいました。大変な困難の中で主に仕え、キリストの福音の使者としての生涯を過ごしてきましたが、私の父からの伝え聞きによると極貧の中での生活で、男6人の兄弟に7人目女の子が与えられたのですが、栄養失調のために結核になり早死にしまいました。ようやく与えられたたった一人の娘を失った悲しみのどん底にあった時に与えられたみ言葉「わたしは裸で母の胎を出た。また裸でかしこに帰ろう。主が与え、主が取られたのだ」(ヨブ1:21)が祖父の愛唱聖句だそうです。やがて関東大震災の時、当時牧していた宮城県佐沼から神奈川に信徒を訪問していた時に被災し命を失いました。

2代目私の父澤野正幸は祖父が厚木で開拓伝道している時に出生しましたが、岩手県遠野教会で過ごしていた中学生の時に、当時宣教師として遠野教会を手伝っていたブゼル先生に導かれるようにして献身の決意を与えられたそうです。その当時勘当が解かれたのか、年に一度厚木の実家から一俵の米俵が送られてきたそうです。それを祖父は貧しい信徒一軒一軒に分け配ることを常としておりました。父正幸もその配達人の一人として用いられたそうです。ある年、父から大船渡在住の信徒で鈴木さんという方の元へ実家から送られてきたお米を届けるようにと頼まれました。出かけようとした時に、ブゼル先生から呼び止められ、「あなたはお父さんの素晴らしい働きをお手伝いしているのですよ、あなたもお父さんのように牧師にならなければね・・・」と英語で語りかけられたそうです。父はブゼル先生から英語を教えてもらっており、その時語りかけられた「牧師にならなければ・・・」は英語では「You have to be a pastor」(ユー・ハヴ・トゥ・ビー・ア・パスター)ですが、その言葉を2時間ほどのバスでの道のり中、

何度となく諳んじながら大船渡へ向かったのです。終点のバス停を降り、目当ての鈴木さんの家を探しながら歩いて行くと、一人の全盲の方が子どもに「めくら、めくら・・・」と喋りながら歩いている場面に出くわしました。子ども達のあざけりの言葉を、怒りもせずにじっと堪えているその方の姿に強く印象づけられながら、ようやく鈴木さんの家を探り当てることが出来ました。

一軒のボロ屋の玄関が開けられ出てこられたのが、先ほど子ども達からいじめられていたあの目の不自由な、しかし静かに耐えておられたあの方だったのです。「正幸くん、よくこられたね・・・」。大歓迎で迎えられ、「めざし」をおかずにした、最大の昼食のもてなしをうけ、しばらくの団らんの後にお別れする時、鈴木さんは「正幸くん、きみもお父さんの跡を継いで、牧師になるべきです・・・」との声をかけてくれたのです。ここに来るときにブゼル先生が仰った英語の言葉、そして何気なく心にとめていた言葉と全く同じ言葉に出くわしたのです。それが主なる神からの召しの言葉となったのです。

3代目の私、澤野 寛は、何ら劇的な召しの体験はありません。ただたまたま小さい頃から「自分は大きくなったら牧師になる」と決心していた、その決意がどういうわけかわからなかったというだけです。しかしそこには、先立つ神の先行的な選びと召しがあったことと信じております。それは主なる神の「デイ」の中での召しです。「デイ」（ギリシャ語で *dei*）は「～ねばならない、～するはずである、当然である」という前述英語の *have to* と同じ意味ですが、新約聖書では神による必然性を表現する大切な言葉のひとつです（マルコ 8：31 等）。

全く何の取り柄もない、能力もない、生来言葉を話すことが苦手なこの者もただただ神のデイのもとで、主の召しの力によってだけ、今まで主に仕えることが出来ました。そのデイによって70歳で愛する高槻の姉と別れ、横浜の地へとやって来ました。そしてこのデイのもとでこれからも霞ヶ丘教会、金沢文庫教会で主の証人として用いられたいと願っております。金沢文庫教会は、敬愛する白根先生が開拓伝道当初、私が神学生の時2年間お世話になった懐かしい場です。再び御教会で、皆様との主にあるお交わりの中に加えていただけることを心より感謝しております。

金沢文庫教会の思い出

矢野伸雄（前横浜南キリスト教会牧師）



神様が与えて下さった方々との出会いを記したいのです。私の母は福島県の田舎から東京に来て住み込みの女中として働きました。その家に、書生として生活していた方が、あの北海道家庭学校の創設者留岡幸助の四男清男さんでした。留岡幸助の親友有馬四郎助は関東大震災の時、小菅刑務所長として受刑者を信じたことは素晴らしいことです。その有馬四郎助の三女実枝さんが、娘さんの亜都子さん、お孫さんの亜子さんと共に礼拝を献げておられた姿は今でも忘れません。私の母は有馬さんのご家庭で開かれた祈禱会には必ず参加し、実枝さんとのお交わりを喜んでいました。実枝さんが天に召された時、その前夜式で私は思い出を語らせて頂きました。今でも忘れることはできません。

更に留岡幸助の家庭学校の理事として16年にわたって尽力してくれたのが、あの麻布中学を創設した江原素六です。その江原素六と関係の深い江原長人兄、みゆき姉のお二人が、そして梅谷興三、道子ご夫妻と共に、信仰を持って生きる素晴らしさを私達に教えて下さいました。私の母を「お姉さま」と呼びかけて下さったみゆき姉にとっても親しみを覚えて、大好きなおばあちゃんでした。みゆき姉の葬儀の時、思い出を語らせて頂きました。江原長人兄は祈りの方でした。長人兄がご病気で入院中大分お悪くなってからのことでしたが、私は妻と二人でお見舞いに行って長人兄と三人で祈ったことを思い出します。ベッドに横たわっておられる長人兄の手を取って、その上に妻の手を重ねて祈りました。私は思わず泣いてしまいました。涙が私の手にも、長人兄の手にも落ちました。その時あの大きな手で私をしっかりと握り返して「矢野さんが神様に用いられますように」と祈って下さったことが忘れられません。その時私は癌と闘いながら神学校に通っていたからです。「生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストがあがめられることである」と聖書は告げています。長人兄を通して神様の愛をこの私に示して下さいました。感謝します。

母と文通して下さった方に、山崎静子姉がいます。礼拝堂のいつもの席の静子姉のお姿が思い出されます。そして今は石川県に転居なさいましたが、横山節子姉のお母上菊枝姉も私の母と仲良くして下さいました。節子姉は私たちが参加しているアシュラムという静まってみ言葉を聴く集会に参加しておられます。

聖歌隊のことを記さないではられません。ターリー宣教師ご夫妻、梅谷姉、

塚原姉、山林兄、大内ご夫妻、矢野裕子姉、そして私達等大勢の方々が鈴木敦子姉のご指導で、主に向って喜びの叫びをあげました。礼拝賛美の素晴らしさを体験しました。

中山将太郎兄貞子姉ご夫妻のご家庭で開かれた学びを通して、喜びと力を頂きました。中山先生には何回も助けて頂きました。胆石の手術の時も前立腺癌の時もそうです。先生のすすめで癌が早期に発見され、大事に至りませんでした。あれから15年が過ぎました。そして会社の研修でヨーロッパへ行った時、心臓に異変があるとのことで、ローマの病院に救急車で入院しました。この時も中山先生はローマの私に電話を下さり、私の話を聞いてすぐに眼科検査を受けるようにとアドバイスして下さいました。私はすぐローマの病院を退院してベルギーのブリュッセルで夜遅くでしたが救急の手術を受け、失明を免れたのです。今元気で過ごしていることを思うと、神様が中山先生を通して働かれたと信じています。中山明州兄とは霞ヶ丘教会で教会学校の奉仕を一緒にしたことが思い出されます。

中川澄子姉はご自分の病の体験を通してこの私を度々励まして下さいました。今でも電話でよくお話をします。その中川姉のお宅の近くの公園でよくテニスをしておられた伊藤 禄兄が思い出されます。英語がご堪能でご指導して頂きました。教会のすぐ近くにお住まいがあり、いつも隠れたご奉仕をされた堀田歌代姉のお姿は数々のことを教えて下さいました。ご夫妻と娘さんと3人で最近私の家に来て下さったことは喜びです。山林義弘師はお母上彩子姉ともども、よく一緒に我が家で祈りました。高井慶一朗兄はどうしておられるか、懐かしいです。川島伊久夫兄のお宅を開放していただいたあのクリスマスは、ご家庭の温かさが素晴らしかったです。小林継太郎兄は私が北部共済に入院した時励ましに来てくれました。よく私の家で語り合ったものです。中谷かおり姉はお元気でしょうか。松田みちよ姉の家に何回も訪問しました。森清信子姉の別荘で涼しいひとときを過ごしたことも思い出されます。

白根牧師は金沢文庫教会を今も生命を賭けて守って下さいます。清子夫人がああ古いオルガンで礼拝音楽を担って下さり、いつも隠れたご奉仕をなさるお姿が思い浮かびます。

最後に、私は1997年4月に妻と共に神学校に入り、み言葉を伝える決心をし、横浜南キリスト教会に遣わされ、2012年3月をもって牧師を退きました。元気でいるうちに若い牧師に後を引き継ぐことが出来て、今思いますと神様の導きと感謝しています。

「わたしの時はあなたのみ手にあります」

このみ言葉を信じて私達二人の残された一日一日を神様のみ手にお委ねし、「主の証人」として歩みたく希っています。

金沢文庫教会の思い出

平 良 節 子(中城城東教会)



1963年、今から丁度、50年も前、私は関東学院大学神学部へ入学しました。その学生時代の思い出はほぼ金沢文庫教会での思い出と重なります。教会は白根先生のご自宅でした。礼拝も、教会学校も、その他聖書研究、祈禱会なども、ご家族ぐるみのアットホームな雰囲気、沖縄から出てきて、神学部の女子寮にいました私にとって、とてもほっとする居心地の良い教会でした。その間白根先生には、優しく、厳しく、いろいろ訓練もしていただき、また牧会者としてのお働きも学ばせていただきました。

白根先生との繋がりには1969年、私が沖縄へ帰り、沖縄バプテスト・中城城東教会に所属する今日に至るまで続き、金沢文庫教会とは姉妹教会として、また、先生は当教会の名誉牧師として、たびたび沖縄をお訪ねくださっています。

白根先生はご自身の戦争体験も込めて、来沖なさる時は必ず、戦跡や、沖縄の歴史の跡を尋ねられます。そして、つながりのある教会、友人をお訪ねになり、その沖縄への思いの深さにいつも感動させられています。先生は静かなる平和大使です。未だに問題多き沖縄だからこそ、金沢文庫教会と中城城東教会の姉妹教会としてのつながり、また、白根先生の平和大使としてのお働きが、まだまだ必要なのだと思われます。

文庫教会創立 56 周年記念に向けて



才木正雄（元ゆりかご園 園長）

56 年前といえば、昭和 32 年となりましょうか。その頃に白根先生がこの文庫教会を出発させたとするならば、それは想像に絶する大きな決断とご努力と、そして真剣な祈りの賜物であったのではと、心より尊敬を申し上げる次第です。

この度は多分多くの教会員の方々から、お祝いやら感謝の原稿が寄せられることと思いますが、不肖私もここで、過ぎた半世紀余りの年月のご努力へのお祝いと併せて、これからの文庫教会の更なる発展への展望のひとこまになればと、若しお許し頂けるなら、次のことを述べさせて頂きたいと思います。

1. 私は文庫教会の会員ではありませんが、白根牧師先生は私の関東学院時代の良き先輩であり、かつかねてより文庫教会の真っ直ぐな伝道活動に心より尊敬していた、という気持ちから、遠慮なく言わせて頂くならば、これからの望まれる 50 年のためには、勿論白根先生に頑張ってもらえるのだけれど、その白根牧師先生のもとで協力して頂ける、良き後継者を早く決めることが大切で、そのために現教会員の方々全員が祈りつつ、真剣に話し合うことが、急務であらうと思います。

2. 次に文庫教会の周辺は、今はご多聞に漏れず、人口流失の激しい地域になっているようですが、だからと言って人が一人も住んでいないわけではないとするならば、その少ない地元の方々に、より一層親しまれるレスト・ホーム(憩いの家)的な一面も合わせもつ、そんな文庫教会の姿はいかがでしょうか。例えば日曜日以外に月に一度程、曜日と時間を決めて教会内で「お茶の会」とか「○○音楽会」などを企画されては……。そしてそのことを暖かく掲示されたら、そのことによって地元の方々と文庫教会との間の絆が、やがてどんどん広がって行くのでは……？

3. 今後若し、礼拝堂を改築されるような機会がある時には、ご高齢の方や身体のご不自由な方々なども気兼ねなく教会に出入りして頂けるよう、また、重量不安解消のためにも、できれば礼拝堂を二階ではない一階になるよう、ご検討されることはいかがでしょうか……。

尚、これらのために、若し微力なこの私にも協力させて頂ける事があれば、喜んで何なりとさせて頂きたいと思います。

有難うございます、金沢文庫教会

志賀ミチ（元関東学院短大講師）



金沢文庫教会と言えば白根先生。私の白根先生との出会いは、関東学院六浦中学校に入学して最初の聖書の授業の時でした。教室に入って来られた先生は、「僕のことを知っているかい。知らねえだろう。知らねえはずだよ。僕の名前はしらねえだ。」と言われ“白根”と大きく黒板に書かれ、「知らねえけど神様を信じている。」と言われて“新治”と書かれました。爾来60年になりますがはっきりと憶えています。それから中学・高校の六年間、聖書の授業や当時YMCAと呼ばれた宗教部の活動を通して、白根先生には大変お世話になり多くのことを教えていただきました。そのころ白根先生が教会を建てるために、自ら古新聞や古い電話帳の回収をして建設資金を作っておられると耳にしました。先生のその熱意と行動力に感心しましたが、その本当のご苦勞を察することができるとその時の私は大人ではありませんでした。そしてその教会の建物ができた後に写真を拝見する機会がありました。それは外に階段のついている四角い建物でした。これが教会？その頃の私の頭にあった教会のイメージは、絵本や欧米の写真にあるような大きな建物で塔があって十字架がついている、そんなものだったのでしょう。今から思えばほんとうに恥ずかしく申し訳ないことです。今さらながら心からお詫びしたい思いです。白根先生は主が祝された主の体であるこの教会を限りなく愛し生かし、この教会を通して数えきれない沢山の人たちに福音を伝え、救いに導いてこられました。この教会に集われた方々と共に歴史を重ね、金沢文庫に根を張った教会を育ててこられました。後に私もこの金沢文庫教会にささやかながら関わらせていただくのですが、その頃はそんな事は知る由もありませんでした。

金沢文庫教会のもう一人の大事な人、もっと長く大事であるはずだった人、と私は思うのですが。それは大井人先生です。大井先生は、私達の思いからすると、道半ばで天に召されてしまわれました。“神様、なぜですか。”という思いを私は心の隅から拭い去ることができません。

大井先生と私は小学校の途中から、中学、高校、大学と(私は短期大学部でした)一緒でした。中学・高校で、ともに白根先生にご指導を受けていた頃の私はとてつもないお転婆、男の子に負けない勇ましい女の子でした。大井先生の方

がやられ気味だったと思います。大人になり大井先生は教師・牧師になられ、その明るい人柄と優しさで、多くの人たちに愛され、多くの人たちを愛し、主に導く働きをしてこられました。私は教会も違い、お会いする機会は少ないでしたが、文庫教会に伺ったときやその他の場所でお会いしたとき、親しく「よお！」と言って下さるだけで、その人柄の明るさと優しさが伝わり気持ちがほっとし、慰められたことが何度もありました。そのお人柄、人を思う愛の深さ、そして伝道への熱意はどこにおられても多くの人に慰めと力を与え、信仰に導き、神様のために大きな働きをされていたと思います。白根先生とともに大井先生は金沢文庫教会の大事な柱であるはずの人だったと私は思います。

この金沢文庫教会に私も細々ながら、かなり長い期間にわたって関わらせて頂きました。私は米国の神学校を出ましたが、学びましたのが牧師のコースではなく宗教教育でしたので、働きの場がないまま、同盟事務に隣接してありました宣教師事務所にお手伝いに週一回行く他は家事育児に翻弄されておりました。そんな時白根先生から、金沢文庫教会の聖日礼拝の手伝いをして欲しいとのお声がかかりました。白根先生は教え子の一人が、機会を与えられ勉強をしてきていながら、それを活用する道がないままにしていることを心にかけて下さったのです。私はとにかく教会で何かお仕事ができるということが嬉しく、お受けしてしまいました、聖日礼拝でお話をするのを！ひと月か二月に一度ということです。私はいぶん長く続けました。私は説教するのではない、私の思いを話すだけとの思いでしたが、分不相応の場に立つことの怖さと力不足が申し訳なく、何度か白根先生に辞めたいとお願いしましたが、先生は聞く耳をお持ちではありませんでした。でもこれが本当は私には大きな恵みだったのです。私は拙いお話の準備のために苦しみ、勉強し、祈りました。その成果は神様からの成績表がないのがありがたいですが、私には知恵と知識を増させ、信仰を鍛え大きな恵みでした。それよりも何よりも最大の恵みは文庫教会で沢山の信仰の友にお会いできたことです。特に心暖かい姉妹方です。いつも暖かく迎え、笑顔で励まし、祈って下さいました。本当に、本当に有難うございました。私には大きな支えでした。

非常勤英語講師を定年で退職しました後、力の衰えを感じ文庫教会のお手伝いを辞めさせていただきました。恩師白根先生があのように現役で活躍しておられるのに、本当に申し訳なく思います。神様の祝福とお守りとを心から祈ります。

もう一つの母教会

金沢文庫教会

鈴木 敦子 (捜真バプテスト教会)



創立56周年、おめでとうございます。

私が金沢文庫教会とかかわりを持たせていただくようになったのは、20年以上前です。当時私は3人の子育て真っ最中。夫は日曜日が仕事のことが多かったので毎主日の教会出席はかなり大仕事でした。そんな時、同じバプテスト同盟の教会が近隣にあることを知り、伺ったのです。小さいけれど 温かな家庭的な教会でした。

まもなく、奏楽のご奉仕をさせていただくようになりました。その後、神学生としていらした並木裕忠先生から 試みの一つとして「聖歌隊を作りたいので協力してもらえませんか」という提案をいただきました。よく考えると教会員ではない私がいつまで責任を担えるかわからなかったのですが お引き受けしました。数名の中高生とお父さんお母さんの存在のご夫妻（現 矢野牧師夫妻）を初め、ターリー宣教師ファミリー、楽器を演奏できる若いご夫婦など、すぐに10人ほどの聖歌隊ができました。ギターを入れたプレイズソングを中心に毎週皆さんと恵まれた楽しい賛美練習と交わりを致しました。何度か海でバーベ Q をしたこともありましたね。キャロリングにもご一緒しました。礼拝出席30名ほどの中、半分が聖歌隊、ということもあり、「みんなが聖歌隊、というのは礼拝の本来の姿かもしれない」と思いました。中山先生がガウンを献品してくださり、教会をあげて応援してくださることも励みになりました。

現在、私は母教会に奉仕の場を戻しましたが 今も、月に1回の奏楽者勉強会に伺って一緒に学ぶ機会を持たせていただいています。皆さまとの時間を心から感謝しています。ここは、私のもう一つの母教会です♪ Soli Deo Gloria ♪ (ただ、神の栄光のために)

特 集

絹 の 道

梅 谷 興 三



10年ばかり前、金沢文庫教会の聖書研究会(現在の聖書をひもとく会)で、白根牧師よりこんな話を聞いたことがあります。

それは日本のキリスト教伝来に関する話でした。私どもが中高時代に習った日本史では、キリスト教は1543年ポルトガルから鉄砲が初めて鹿児島種子島にもたらされてから6年後、フランシスコ・ザビエルにより布教されたとされていますが、実はそれより約1000年ばかり前にすでにキリスト教は伝来していたのではないかというのです。私には最初は一寸耳を疑うような話でした。しかもそれはヨーロッパからではなく中国からだという話です。それは景教という名称でした。そして日本での景教寺院の写真などを見せてもらいました。大学教授である佐伯好郎氏—景教の世界的権威、早稲田大学名誉博士(1871～1965)—の研究成果による話であることが分かりました。当時はそういうこともあったんだなという程度で以後そのことは、すっかり忘れていました。

ところが最近店頭で求めた本の中に日本の仏教に景教が影響を与えているのではないかという文面を見たのです。寺島実郎氏—三井物産戦略研究所会長

1947～) —の著作「世界を知る力」です。

ここで景教について概要を説明します。景教とは中国語で光の信仰の意味であり、景教教会は大秦寺といわれた。古代キリスト教の一派（カソリック、ギリシャ正教、プロテスタントいずれでもない）にネストリウス派というのがありますが、イエスの母マリアに対する見方から異端とされ中央アジアを經由して中国に至り、中国唐の太宗の時代に公認され、元の時代まで存続したとされるものです。佐伯氏によると日本には、渡来氏族の秦氏によってもたらされたといえます。

寺島氏が言及しているのは景教が公認されたのと同じ時代に唐へ留学していた真言宗の開祖空海が景教に触れなかったはずはないというのです。高野山には後に景教の碑が建てられているのもその表れで、この碑は明治末に来日したアジア研究家の英国人であるゴードン夫人が真言宗と景教の関連性を確信し、高野山に中国西安(長安)にあった景教の記念碑——大秦景教流行中国——のレプリカを建立したもので今も高野山に現存しているといわれます。

また浄土真宗本願寺派の本山である西本願寺には景教の聖書の一部(マタイによる福音書——山上の垂訓——)の漢訳である「世尊布施論」が所蔵されており、開祖親鸞が景教に学んだとする説があります。

また外国の神学者の中には親鸞の言行録・歎異抄を見てこれぞ日本のキリスト教といわれたのを聞いたことがあります。が上記の歴史的背景からすれば仏教とキリスト教は少なくとも異質のものではなく、むしろ深いところで交流があったものと推察されます。また絹の道（シルクロード）とは古代中国の特産物であった絹がこの道を通して、西アジアを経、ヨーロッパ、北アフリカへと横断した為つけられた名称ということですが、原始キリスト教の一派が、この道を逆に印度や中国にそして日本にも、やって来たことに思いを馳せるとき深い感銘をおぼえます。

以 上

女性会について

梅谷 道子



文庫教会婦人会として発足した女性の集まりは、女性会と名称が変わり、現在も歩みが続けています。

私も皆様とともに会の活動に加わせて頂いています。例会は基本的には、第二日曜日の礼拝後。前回の活動の反省や今後の予定などを話し合うだけのこともありました。主な活動内容は、イースター、クリスマス、父の日などの祝会の協力として食事の準備、必要に応じてプレゼントの用意、事前には会場の清掃やセッティングもあります。他教会からお招きした説教者を囲んでの交わりの会も同様です。高齢や病気のため礼拝に出席できない方々に葉書を出したり、クリスマス前に分担してカードを作って発送いたしました。会員の中から指導者に恵まれ、絵手紙、布製バッグに絵を描いたり、ときにはタイ料理の講習を受けるなど楽しい時間をもつこともできました。「山の教会にいらっしゃいませんか」というピラ配りをしたこともあります。

当教会はバプテスト同盟全国女性会に所属していますので、総会、後援会、世界祈禱日などに、都合のつく者達が出向き、交わりをさせて頂いております。高齢や多忙などの理由で遠方での会には出席できないこともありますが・・・。

関東部会の女性会では毎年、宣教師が眠る多磨霊園の清掃奉仕があります。これは各協会が交代制で、ときには二つの教会が共同で行います。文庫教会の参加は初めてではありませんが、最近では一昨年秋に行いました。当教会の女性会での活動には、いつも男性教会員の有志の参加があります。この時には車を出して頂き、運転者以外は道中も楽しい小さな旅でした。墓は草に覆われていて作業は大変でしたが、道具も積めたし、男手のお蔭でずいぶん助かりました。

作業終了後に賀川豊彦、新渡戸稲造、内村鑑三先生方の墓にも寄り、墓前で祈り、賛美をささげました。

新年度メンバー、役割の交代が少しありましたが、今後女性会として「聖書を読んで話し合う」「キリスト教や偉大なキリスト者にかかわる見学会」などもできたらという意見も出ています。皆が神を真ん中にしての交わりは楽しく、また貴重な時間でもあります。祈り、賛美の交わりを通して懇親を深めるとともに視野を広め、互いの信仰を高めることが出来ればと願うものです。

新会堂建築をめざして



久保田 和彦

56年前、文庫教会の前身「金沢文庫祈りの家」が牧師の自宅を開放してこの地に立ち上げられました。その15年後に文庫教会として釜利谷の地に会堂が建築されて、今この会堂で主日礼拝が守られています。この50数年余りの歳月、神様の導きと御加護を心から感謝します。

この会堂が多くの人の祈りと働きによって建てられたことを覚えつつ、さらなる神の新会堂建築をと考える時期が来たと思われます。というのは白根牧師より地震等に対して万全を期したいとの相談があったからです。そこで図面資料を取り寄せ、現況の建物を調査し、施工業者に現場説明をし、施工方法、見積もりを依頼しました。それから二日経ったあの3月11日の大震災が起きました。なんと会堂補強の準備を神様が導いて下さったかのようで、不思議な思いをしました。

出された見積もり書を検討し、役員会で説明をし、これから東北の復旧工事開始と同時に建築費高騰の可能性を考え、即5月の連休後から工事を始め、約1か月で完了しました。その工事は、会堂外側壁ブレース及び妻側にも外側ブレースを施工、一階天井に床ブレース、及び座掘止補強などをして、新会堂建築までの当座を凌ぎます。

日本の建築は1980年より新耐震設計の指示が出され、教会はそれ以前の建物のため、新耐震の工事が主要構造部及び基礎補強にも及ぶことになりました。増改築するには、費用や施工についても難しい状況になります。私たちの教会には高齢者が多い現状にあり、それを考えると、一階に玄関及び礼拝堂を置く新会堂の建築が適当と思われます。車椅子の方、杖を使用している方も自分の力で礼拝堂に入れるようにと思っています。建物も人に優しいものを造っていかねばならないと考えます。

教会の役割は信徒コミュニティにおける結婚式、葬儀、学習などが求められるだけでなく、地域に開かれた教会という姿勢を具体化していくためにボランティア活動の拠点、地域交流を可能とする施設などが望まれると思います。特に野村住宅地区は災害時には避難地域としての役割があり、教会を開放して、地域住民に提供したり、食料や寝具等の保管など、通常地域活動の中で、小さい教会ではありますが、その役割を果たせたら良いと思います。

神の導きにより信仰を深め教会員の交わりだけでなく、地域住民にも同じ手を差し伸べて、キリストの教えを実践していきたいと思います。神の栄光を顕す教会の一端に加えていただけたら感謝であります。

賛美のよろこび



久保田裕里子

私たち信仰者は歌うことを「賛美」といいますが、どのようなことであろうか。

神の御名の栄光を褒め歌う。自分自身の信仰告白や、何かを祈り求める時、感謝を捧げる時等々、自分の心の表現として歌うことができます。仕事をしていて賛美歌がエンドレスになることもしばしば。曲と歌詞が調和して心を打ち感動するものもあります。また季節を感じる曲もたくさんあります。

キャロルは、クリスマスを待つ喜びを湧き立たせてくれます。町はクリスマス商戦で賑わいますが、そのような中、キャロルが流され、人々は知らず識らず賛美歌を聞いています。私もそのキャロルを耳で追いながら町を歩き、クリスマスの準備をします。

イースターの曲は、春の喜び、冬の寒さと厳しさから抜け出た明るい陽射しを想像します。幼少の頃、外国の婦人がイースターハットをかぶり、教会に出席する光景が今でも脳裏に焼きついています。

また礼拝の中で涙される方を見かけます。

賛美は礼拝を導き、人の心を砕く力を持っていると思います。

ある本にこんなことが書かれていました。み言葉は生きていて力があり、人を救う力がある。音楽には、人を救う力はないが、人を感動させる力がある。従って、み言葉が「音」という衣を着た時、人の心に働きかける効果は絶大となる。そして、聞き手がそれを理解した時、伝達の目的は果たされることになる、と。

毎週礼拝で歌われる賛美に心と思いを込めて、神の栄光が増々豊かに輝くよう文庫教会の皆様とさらなる一致を目指して参りたいと思います。

詩編 51 : 17 主よ わたしの唇を開いてください。
この口は あなたの賛美を歌います。 (新共同訳)

神へのいけにえは、砕かれたたましい
砕かれた 悔いた心
主よ あなたは
それをさげすまれません。

(新改訳)

「教会学校の歩み」

白根 義輝



我が家は、教会でもないのに、「金沢文庫祈りの家」として、日曜日になると、6畳間と8畳間の仕切りを外し、パイプ椅子を並べ礼拝をしていた。小学生の私が参加しても、ちっとも話が分からない。それもそのはず、子ども向けの教会学校ではなく、中高生対象の礼拝だからだろう。中には、防衛大学の学生もいたことを記憶している。小学生の自分にとって、最適の居場所ではなかったが、それでも礼拝には参加し、たまに友達に誘われて、関東学院教会の教会学校に行くこともあった。その後、中学校に進学してからは、卓球に夢中になり、寝ても覚めても白いボールのことしか頭になく、礼拝にも殆ど出なくなってしまう。

「金沢文庫祈りの家」の時代には、これといった教会学校の活動は行われず、現在の夏山の地に移ってから始まったようである。

元関東学院六浦中高の校長、永野肇先生や犬塚志朗先生及び現関東学院長の森島牧人先生が、東京神学大学院生の時、教会の2階の畳の部屋に住んでいたこともあって、教会学校の初期の活動を担っていらしたようだ。

その後、教会の1階にいらした高山正治神学生（後に、岡山県で長きに亘り牧会された）及び蓮本神学生が中心になって運営を続けた。私は、1978年より加わり現在に至る。

当時は、参加児童も10名ほどおり、いろいろな行事を行うことができた。

夏休みには、野島にある横浜市野島青少年研修センターに泊まったり、テントを持って丹沢のキャンプ場に出かけたり、六国峠を越えて鎌倉に行ったりと、思い出がたくさんある。

野島の施設使用は、抽選で決まるため、使用できないこともあった。ある年、抽選会場で大師新生教会の清水元先生と偶然お会いし、どちらかいずれかが外れた場合、合同で行おうと約束し、幸か不幸かそのとおりととなった。

やがて、宿泊行事が野島公園でのバーベキューに変わっていった。ここ10年は、礼拝堂以外での活動は、全く行っていない。何故ならば、この頃の子どもたちは、ピアノやバレエなどの習い事や学習塾通いで、ことのほか忙しいのが実情である。日程を調整して、都合のいい日に合わせて行おうとしても、非

常に難しくなってきた。

30年前頃、教会学校に集まるのは、殆どが近所の子どもたちだったが、小学校を卒業すると教会から離れていくこともあり、やがて、教会員の子が中心のメンバーとなり、大井義人君や御園兄弟、高山君、高井慶一朗君、堀田功君、白根純人・智子などが出席していた。他には、クリスチャンスクールの児童が加わっていた。

教師も、ターリー宣教師夫人や山林義弘伝道師がレギュラーとして活躍された時代もあり、現在は、梅谷道子姉が献金感謝の祈りを、倉 薫姉が奏楽を、殆ど皆出席で、また倉禎一兄が2か月に1度、児童説教をお手伝いしてくださっている。

初期の時代から現在に至るまで、白根牧師夫妻はもとより、神学生を中心に、様々な人たちによって教会学校が約40年運営されてきた。教師をされた方々は、年齢や性別、職業や体験してきたことや信仰歴など、それぞれ違うが、一人ひとりが受けた神様の恵みを、また福音の喜びを幼子に伝えたいという思いから、バトンが手渡されてきた。

今年度出席しているのは、横浜英和小学校の4年生、小澤菜々子さん、1歳と5か月になった弟の司君とお母さん、関東学院六浦小学校4年の清水凜佳さんである。

出席者が多くても少なくても、例え一人になったとしても、教会学校を運営することは教会の使命であることに変わりはなく、神様の守りと導きの下に、バトンをリレーしていきたいと思う。

終わりに、編集委員の方より、教会学校について記してほしいとの依頼を受けましたので、その意向に沿いながら、徒然なるままに拙文を綴りました。

しかし、確かな記録を元にしたわけでもなく、あくまでもおぼろげな記憶を頼りに記したので、お名前や時系列など、不安な点が多く、記憶違いには寛大な心をもって御容赦願いたいと思います。

東北被災地と共に



塚原 明子

昨年5月に発行された「あかしびと」で一度それまでの東北被災地ボランティアについて書く機会を与えられましたが、今回教会の56周年に際してその後のボランティア活動について書いてもらえないかとお話をいただきました。震災の年から年に4～5回のペースで東北に足を運び続け、訪れる度にゆっくりとですが向こうの状況が変化しているのを実感しています。そのような中でこの一年間で自分の中では何が変化したであろうか、新たに私に証できることは何であろうかと今回お話をいただいてから思いを巡らせてきました。

昨年の「あかしびと」の原稿を私はこのように始めています。

『昨年3月に起きた東日本大震災では、人智を超えた自然の力を前に己の無力感を痛感し、自分が生きていく上で本当に大切なもの、真実なものを見つめなおすときを与えられた人が実に多くいたように感じています。また人間が止まるところの知らない浅はかな欲から作り出したものを、結局最後には自分たちで制御しきれなくなり翻弄されるという悲劇に人間の愚かさをつきつけられた人も多くいたのではないのでしょうか。私自身、あの惨事を前に、神様が人にこのような試練をお与えになるその御心は一体何なのかと考えずにはいられず、また小さな自分に今何ができるのかと自問する日々が続きました。そして、仕事もプライベートも含めて、自分の生き方を見つめ直し、新たに模索することを余儀なくされました。そうした中で、それまでの歩みに終止符を打った事柄もあり、その喪失感とまた未来に対する漠然とした不安を抱えながら地元や東北で様々なボランティア活動を続けてきました。そこにあったのは、自分とは比べものにならないほど極めて苦しい状況を強いられている方々の役に少しでも立ちたいという思い、そして様々な難しい問題を抱えている今の日本で自分がこれから日本人としてどう生きていきたいのか、という問いに対する答えを探す作業だったように思います。自分の「これから」を考え、歩いていく中で、自分さえよければよいという歩みだけはしたくない、そう強く思いました。正直に言えば、「これからどう生きるべきなのか」この問いに対する明確な答えや道が見えたと言い切ることは今まだできないでいます。しかし東北の方々やボランティア活動を共にした方々との深い交わりの中で多くの思いに触れ、人の強さや祈りに触れ、大きな学びと励ましを与えられました。』

今あらためて一年前の自分の文章を読んでみて、その思いに何一つ変化はない

と感じます。私はいつも「何かできることをしたい」と願い、そして自分の道を模索しながらこの一年も活動をしてきました。その中で新しい気づきや自分の東北との係わり方の小さな変化をここに証することができれば、と思います。

震災の年は、最初の塩竈から始まり、石巻、名取と数箇所を転々とお手伝いしましたが、昨年3月に南三陸町の支援に入った時、その被害の大きさと復旧の遅さに私は少なからず衝撃を受け、その後南三陸町を中心とした活動を続けてきました。また、今年からは縁が縁を呼び、釜石での活動も始めました。震災の年から東北でのボランティア活動を継続してきて、それぞれの場所、それぞれの時で必要とされている支援の形が異なることを実感していましたが、特に昨年から南三陸町に続けてボランティアに入ることで、訪れる度に変化していく町の風景を見つめることができました。この一年で多くの瓦礫や建物が撤去され、町はただただガランと広くきれいになったと感じます。その中で営業を再開するお店があったり、新しく南三陸と気仙沼を結ぶ高速のバスの運行が始まったりと、町は確かに復興に向けて進んでいると感じています。その一方で、繰り返し南三陸町を訪れることで、町やそこの住人の方々の抱えている課題や想いに触れる機会も多くなってきました。

東北でのボランティア活動は、地域のボランティアセンターによって割り振られた現場に行き、そこでその日一日の活動を行います。瓦礫撤去の仕事の他にも、例えば南三陸町では漁業支援（わかめの出荷のお手伝い、定置網の仕立て直しの補佐など）や農業支援（土づくり）、仮設住宅でのコミュニティ作りのお手伝い（集会所でのカフェ。東北の言葉でお茶っこ）など様々な活動があります。釜石では主に仮設住宅を訪れてお茶っこをしながら傾聴ボランティアを行います。

私が東北を訪れる度に強く感じているのは、どの時、どの現場でも、東北の方々はいつも語ろうとなさっているということです。そしてその想いに真摯に耳を傾けることは私たちボランティアの役割の一つでもあります。しかし、そのお話の内容も次第に変化してきていると感じています。最初の頃は震災当時のこと、津波やその被害の話が大部分を占めていましたが、最近では将来に対する不安や国の対応に対する不満、これからどう進んでいこうかといった計画など、東北の方々は今を語り始めているように思います。そこには私自身と全く同じ、人は苦しい過去を背負いながらも、それでも自分に与えられた最後のときまで道を模索しながら今を歩き、前に進み続けなければならないという現実がありました。

震災から時間が経つにつれ、震災格差はより顕著となり、人々の中のやりきれない想いも大きくなっていると感じます。同じ町内でも被災した場所とそうでない場所、被害の大きさや復旧の早さの違い、そして震災以前から抱えている根深

い地域の問題や人々の想い。そういうものが同じ場所に何度かお手伝いに入り、人と人としてのつながりをより濃くしていく中で次第に見えるようになってきました。神様は人を等しく作られ、等しく愛されながらも、どうして人の世はこうも不平等と矛盾に溢れているものか、と何とも言えない悲しみが静かに押し寄せてくることもあります。そのような中で、人は理解されることを、そして寄り添われることを本当に必要としているのではないかと、そう強く感じるようになりました。もしかしたら、わかめの出荷を手伝う人手と同じくらい、話に耳を傾け、想いを共有し、人と人として心を開いて対等に語り合える相手が必要なのかもしれません。私に、被災された東北の方々の体験を真に共有し体感することはできません。でも「知りたい」「理解したい」と強く感じます。ありのままの相手を知ろうとすること、これが愛の始まりなのではないか、今私はそう感じています。許されるなら、きちんと知り、そして共に考え、分かち合い、寄り添いあってこれからを歩みたいと東北を訪れる度に強く思います。

この一年間で私のボランティア活動は少しだけ積極的になりました。それまでは与えられた現場に行き、自分にできる作業に静かに向き合いながら東北の方々の想いに触れてきました。沢山のボランティア参加者の中の小さな一人、一期一会でよい、そう思って活動してきました。そこには「自分は結局よそ者」という小さな遠慮がありました。しかしこの一年で東北で出会った方々との縁が深まり、私は今、共に考えながら歩んでいきたいと感じています。真に人と人としてのつながりを育みながら共に寄り添い合い、未来を作っていくと感じています。

ボランティアでお手伝いに入ったおかげで大ファンになった南三陸わかめを漁師のお父さん・お母さんから直接購入させてもらったり、季節のものをこちらから送らせてもらったりと、個人と個人としての交流も生まれました。また釜石での出会いは、ボランティアだけでなく、日々の出来事や悩みを語り合う「友」としての縁にもつながっています。

ボランティア活動と個人的なつながりのバランスを取ることは難しいことです。人は平等を願いながらも人の世は真に平等であることはできず、人は他者との比較に縛られ様々な感情を抱えながら生きているものだからです。そして、これからの東北の復興の道のりの中で震災格差はますます大きくなるのではないかと私は懸念しています。それでも、私は恐れずに、そしてあきらめずに、縁あり出会った方々と愛をもって誠実に係わっていきたいと思います。昨年の「あかしびと」にも引用しましたが、聖書には「信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中で最も大いなるものは、愛である」(第一コリント 13:13)とあります。出会ったひとつひとつの事柄に真摯に愛を持って向き合っていく、小さな私たち人間にできることは結局これだけなのではないでしょうか。そして愛の活動の原点はまず相手を知ろうとすることなのだと、この一年で実感してき

ました。知ることから分かち合いが、そして未来を共に見つめ、考えることが始まります。ただのひとりの人間として共に泣き、共に喜ぶ、そういう歩みでありたいと願います。

これからの東北の復興、そして様々な問題を抱えた日本社会（あるいはこの世界）は今、真に隣人を思いやり愛を持って未来を作っていくことができるのか試されていると感じます。物質的に豊かに便利になり、どんどん「進化」してきた日本社会はどこかで大きな忘れ物をしてきているようにもときに感じます。知ろうとしなくても、必要なものから不必要なものまで、情報は映像や音声や活字を通して私たちの生活の中に組み込まれ、与えられるようになりました。ネットに繋がれば、世界中の人と瞬時に交信できる時代です。でも真に「知る」ということは本来そういうものではなく、もっと温もりのある能動的な「係わる」活動だったのではないのでしょうか。私は東北でのボランティア活動を通じて、あらためてそのことを学んだように思います。

震災から三年目に入り、ボランティア参加者の数も激減し、そして震災のことを話題にすることも少なくなってきました。東北の方々はみな、「忘れないでほしい」とおっしゃいます。私がここに東北で知ったこと全てを書くことはできません。中にはプライバシーに関わることもありますし、人は自分の体験を通してしか知ることができないこともあると感じているからです。これまで「ボランティアに行きましょう」という表現はあまり好きではなく私は避けてきました。私たちはそれぞれの場所で、それぞれの事情を抱えて自分の人生を、そして自分のときを生きています。しかし、そのような中でも、私たちが隣人への愛を、「知ろうとする」ことを忘れることがないように、と祈ります。それぞれの場所で自分にできる形、できる係わり方で、まだ復興の長い道のりの途中にある東北の歩みを知っていつてもらいたいと思います。そして私自身、これからの自分の道を、クリスチャンとして愛と奉仕の精神をもって隣人である東北と共に歩むことができるように、そう強く願っています。

「生と死」

(2013.4.21.文庫教会での主日礼拝)

(ピリピ 1 : 21~25)

中山 将太郎



キルケゴール (1813~1855) の『死に至る病』を一言でいえば、「絶望」のことである。人はどんな死の危機に面しても、とにかく生き延びようとする。逆に絶望すると、これは死に至る病で、人は死ぬことばかり考え、本当に自死してしまう。

しかし死があるからこそ人は真面目に生き、有限の生を何とか有意義に過ごすことができる。もし無限に生きることができるとすれば、人はそれに耐えられず、自死してしまう。死は生と異なった秩序にあるため、あらゆる人に適用され、生に対する諦め、悟りから一日一日を大切にしておごさざるを得なくなる。

人は一人で生まれて来て、一人で死ぬ。また死が生に対する否定である限り、死は生の必要条件になる。故に人間は生の生理的ゴールとして死を迎えることになる。

でも困ったことに、人は他人ばかり死んで、自分は死なないかのように生きる。否、死ぬとは分かっている、まさか今日ではない、明日でもない、と信じ、今日という日をのうのうと生きる。

死の瞬間は誰でも未経験で不可解極まりなく、永遠の謎として三途の川まで携えていく。とにかく他人の死は自分にとっては単なる不在、自分自身の死は完全に消失、完全な不在である。これは大変！他人事ではない！絶対受け入れ難い！

別面、私の周りには、私の死を悲しむ者が多くいて、「私のお墓の前で泣かないで下さい！」との歌が一時流行した。台湾で結婚式の宴会でこれを歌った馬鹿な奴がいた。でも、彼ら彼女らは皆間もなく死ぬ。前者が第一の死、後者が第二の死になり、この時初めて皆から忘れ去られ、私の死は永遠の死、消滅となる。歴史に残る 2,3 人の有名人を除いては…。その為キリスト教は私たちに来世の信仰を与える。内村鑑三が 20 歳で結核で亡くなった一人娘ルツ子のお棺に蓋をするとき「ルツ子、万歳！」と叫んで、矢内原忠雄ら弟子たちを吃驚させたことは有名である。だから、人類が生き続ける限り、生と死は、芸術、音楽にとりこまれ、哲学と宗教で論議される。

第二次大戦後『夜と霧』で有名なユダヤ人作家、ヴィクトル・フランクルは、私も訪れたことのあるアウシュヴィッツで極限の死の体験をした。そしてそこで苦しんだことは生の一部であり、苦悩と死が存在したことで、人間の存在が初めて完全なものとなる、といった。

話は変わるが、終戦直前の日本で二つのショッキングな事件が起こった。戦艦大和の最後と特攻隊機の沖縄突入である。大和は、今も徳之島北西 200 哩、水深 430m の海底に横たわり、3000 体もの骸が静かに眠っている。当時航空マニアだった私にとり、もし戦争がもう 2,3 年長引いたら志願して特攻で一生を終えたかもしれない。

ただ注意すべきは、戦争のない平時でも死は私たちの周りに幾らでも見受けられる。つい数日前家内の兄嫁が心臓死した。5 日後に夫である兄が後を追うように召された。火葬場で白骨と化した様を見た時、世のはかなさを一段と味わった。そこで教科書のように、また生と死の一頁を教わった。このように実体験として、先人の生と死を教わり、後日私たち自身が同じことを、子供たちに教える。

でも生きている限り生のバトンを受け継ぎ、レースを完走しなければならない。正岡子規が『病牀六尺』で、「病で体の自由が効かない。」、しかし「六尺四方の病牀は、自分にとっては十分広すぎる。そう思うと、嬉しくて病苦を忘れる。」といった。

2600 年前釈迦は王位、妻子を捨て流浪の旅に出た。そして 29 歳、菩提樹の下で悟りを開いた。私達凡人にとり、その悟りはきっと難しく理解し難いものだと思うが、実は簡単極まりないので、まず宇宙には「法(ダルマ)なる秩序が支配し、①「依法不依人」、次に②「法燈明自燈明」、即ち「法」に従い人に従わず、法という燈(ともしび)を明らかにすれば自ら自分の心の中の燈も明るくなり、人生の一切が解決される、というのである。

この「法(ダルマ)」という無形のものを、分かり易く、歴史の中で万人に受け入れられるようにしたのが、イエス・キリストご自身の生と死である。

人々の苦悩は、個人的なものが多く、思い込みによる悩みが多いが、これらを解決するのは容易ではない。

では解決の先決条件は何か？ 犠牲である！ 物を得るには代価が要る。誰かがその代価を払わなければならない。

究極の代価を 2000 年前、イエスがゴルゴタの十字架上でお払いになった。パウロのペリピ書に簡潔にこのことが書かれてある。すなわちパウロはそれはイエスがすでにお払い済みで、私たちはただただそれを信ずるだけでいいといわれた。当然何の功德も行為も要らない。その為のイエスは救い主である。その証拠は十字架であるという「唯信主義」で十分であり、その信仰オンリーでは、あらゆる罪人は悔い改めれば救われる、と説くのである。

パウロの唯信主義の信仰が凝結したペリピ書は短くて、力強い。困った時、苦しい時、悲しい時、最も力を与えて下さる教えが一杯つまっている。パウロ書簡の中で、ペリピ書は私が最も好きな書である。

天路歷程

中山 貞子



50年ほど前、私たちは、台湾は南の屏東市で、蔣耳鼻咽喉科医院を開業していました。当時は若く、体力があって、40台のベッドの入院患者を抱え、住み込みの看護師は30人ほどいました。

その中で、大陸が赤化し、台湾も危なくなつたので、三人の息子を連れ、新潟大学に研究留学し、アメリカで落ち着いて、新しい家庭を築く計画をしましたが、猪初男教授が心配して、日本に留まるようお勧め下さり、最終的に横浜市大で講師を務め、横浜船員保険病院に部長として、食と住を解決することができました。そのためにも台湾の一切を処分し、背水の陣を敷いて新しいスタートを切りました。長男は高校三年になったばかり、日本語と英語の二つの外国語を学び始めたのは大変でした。ちなみに長男は新潟の海岸で朝鮮工作員に拉致された女の子横田めぐみさんと同級でした。

日本で最初に苦しんだのは、さっぱりした淡白な人間関係でした。台湾の友達が来て、台湾で王様やらないで、日本で「乞食」やっていると同情し、言いふらしました。でも自分たちが選択したのだから、ひたすら耐え忍び、徐々に慣れて、今日に至りました。ローマは一日にして成らず、老婆も同じです。今では、もう一度台湾に戻って住むかというとはできません。

よかったことに、台湾と同じく、日本でも憩いの場を教会に見つけました。文庫教会に来てから、35年たち、御年配の方たちが去ってから私たちは歳では「古株」になってしまいました。

いつも前の席に座っておられた江原さん、有馬さん、横山さん、山崎さん、勝山さん、川島さんに、少々若い矢野さんご夫婦、みんな素晴らしい信仰の先輩ばかりですが、天に召された方々も多く、歯が一本一本欠けていくようで寂しいです。

母性的存在の女性会(昔の婦人会が懐かしい)は、弱化し、若い人たちも減る一方で心配です。牧師も「ななそじやそじ」(70,80)を過ぎ、新しい活力の期待できる仕事人が欲しいです。でも、一切は御手にあり、私たちは祈りあるのみです。

74歳のバプテスマ

羽 入 田 毅



2013年6月2日、私は卒寿を間近にしておられる白根牧師から渾身のバプテスマを授けられました。昨年12月23日のクリスマス礼拝で初めて教会堂に座してから数えて22回目の礼拝の日でした。ここに至る礼拝と幾たびかの聖書を紐解く会がバプテスマへの道筋でありました。その道筋の道標にと選んだ「余は如何にして基督信徒となりしか」を読み始め些かの確信を得ることとなりました。内村鑑三が述べているように「如何にして」は「How I became Christian」であり「Why・・・」ではないので私の道標としてはうってつけであると考えました。内村鑑三が新島 襄とともに私の郷里群馬県に関わりがあったのも道筋であったのかも知れません。近くの関東学院大学文学部の図書館の書架で岩波文庫の本書を探し出し出会うことが出来ました。文庫本の書架への館内の通り道での別の書架で見かけた「田中正造伝 嵐に立ち向かう雄牛」（ケネス・ストロング著）がこの後でもう少し大きな確信へ近づけてくれました。

「如何にして」の中で、実践的な愛こそが基督教の本質ではないかと説かれています。内村鑑三の実践が何であったかまでは読み至っていませんが、観念的でなく言わば分かり易い言葉として私に刻まれました。同時に脳裏に閃いたように浮かんだのは田中正造のことでした。クリスチャンであったかどうか知らなかったのですが、農民と自然に対する愛を強烈に実践した人ではないか。「田中正造伝」を数日前に見た書架から取り出し、併読しました。

正造の臨終の場面に飛びます。死の床の枕辺には埃と汗に汚れた頭陀袋だけ。その中にあったのは、演説の草稿、新約全書、帝国憲法とマタイ伝を白い紐で綴じたもの、小石が3個。ここに至って尋常でない巡りあわせを感じたのは単純に過ぎましようか？

さらにストロングは正造に対する最もふさわしい手向けとして内村鑑三の言葉を選んでいきます。あの時代のこの二人の邂逅は驚くに値しないことではありますが、この二冊の本に出会ったのはバプテスマへの道筋に居た私にとっては図書館の狭い空間で起きた奇跡であり、二人に背中を押されたのでした。

かくして136年前に内村鑑三が17歳で洗礼を受けた6月2日を不遜にも私の受洗の日と決めたのでした。

「聖書をひもとく会」の楽しみ



羽入田悦子

わが子よ、わたしの知恵に耳を傾け わたしの英知に耳を向けよ。そうすればあなたは唇に慎みを守り知識を保つ事が出来る。 箴言5：1，2

毎週水曜日午前10時30分、教会一階ホール（月1回は個人宅）でこの会は開かれる。まず讃美、続いてその日に学ぶ聖書の箇所出席者による一節ずつの回し読み、そして白根牧師のお話となる。

この2月は「ガテラヤの信徒への手紙」を学んだ。福音を語ることを使命とするパウロが、満身の力をふりしぼってガテラヤ人に回心を迫る。切迫したパウロの言葉は2千年経った現在でも、私達にそれを迫って熱い。この会が礼拝と異なるのはこの後、軽食を楽しみながらその日学んだことについて、感想を述べ質問をする時間が与えられていることである。律法を重んずるとはどういうことか。パウロの言う「真の自由」とは。「神の義」とは等々疑問・質問は続く。パウロの律法観はイエスのそれとは少し違うのではないかとの声も出る。愚かなガラテヤ人に自身の姿を見るとの感想もある。

それらに対して牧師から丁寧・親切な解説がなされる。回答は後日ということもあるが。他の出席者も自由に自分の考えを述べる。やがて話題は時事・健康・家庭等についての雑談となり、失敗談では笑いに包まれる。

毎回このような感じであるが、十分に準備された牧師のお話は礼拝時の説教同様真剣勝負で、これを聴くのが10人足らずというのは何とも勿体ないというのが出席者全員の異口同音の声である。これが課題としてあるのだが、信仰の成長を願う一同にとっては大きな恵みをいただく時間となっている。

またこの会では時として学びの場を外へ求める。2010年6月には東京の殉教史跡を訪ねた。江戸でもキリシタンに対する凄惨な弾圧があり、多くの宣教師やキリシタンが処刑されていたのにはただただ驚くばかりだった。1623年にも芝口札の辻で神父数人を含む50人が火刑によって殉教した。見せしめのために東海道に面した小高い丘の上で行われたという。少し奥まった場所にある「元和のキリシタン殉教碑」の前に立ち、約400年の時を超えて捧げられる白根牧師の鎮魂の祈りに頭（こうべ）を垂れながら、恐ろしい時代が巡り来ることのないようにと共に祈った。

さて今年だが、現在放映中の大河ドラマ「八重の桜」の八重の夫である新島 襄ゆかりの安中を訪ねてはどうかとの案が出ている。新島 襄は群馬県出身で「上毛カルタ」でも「平和の使徒（つかい）新島 襄」として親しまれている。ちなみに内村鑑三も群馬県出身で「上毛カルタ」では「心の灯台内村鑑三」となっている。

実現するとすればさしずめ「秋の安中に平和の使徒・新島 襄の足跡を辿る」というキャッチ・フレーズになるであろうか。

感 謝

大きな愛に包まれて

井上美代子



創立 56 周年おめでとうございます。その後半の 25 年前、娘(高井幾世)家族は千葉の稲毛海岸より、娘婿の横須賀転勤にともない釜利谷西に引っ越してきました。二人目の孫の出産間近ということもあり、一戸建ての社宅を与えていただけたのです。娘夫婦は共に関西出身で近くに知り合いもなく、引越しの手伝いに姫路から出てきておりました私も、もちろん同様でした。不自由な生活に困った夫からは「何時までおるのか」との電話が入る一方、娘のお腹はいよいよ大きくなって、私は途方にくれていました。

千葉を立ちます時『穴川』のナザレン教会の森牧師先生より、白根先生がいらっしゃる『金沢文庫教会』が一番近いと教えられて居りました。ああそうや、教会へいってみよう。どなたかが助けて下さるかも知れないと思い、引越しの翌日 3 歳の慶一郎と三人で金沢文庫教会の日曜礼拝に出席すべく出かけました。

お隣りに座っておられた方が親切に聖書や讃美歌を見せて下さいました。その時私はこの方に娘をお願いしてみようと思いました。そして後日それが叶いまして私は姫路に戻ることができたのです。

それから 25 年間困った時には牧師先生ご夫妻、そして教会員の皆様に助けていただくという娘家族の生活が始まりました。そしてデパートのバーゲンで大きなオーバーを買ってもらって引きずる様に着ておりました上の孫の慶一郎は 30 歳に、四年遅れで生まれた二番目の孫で浜っ子の亨は 26 歳になりました。二人とも立派な若者へと成人して参りました。そしてその娘家族に一昨年私も加わることになったのです。文庫教会があったからこそと、深く深く感謝致しております。

この二十年間に嬉しかった事は慶一郎が受洗の荣誉に与りました事、悲しかった事は清子奥様を天にお送りした事でございます。残された者として清子奥様の御意志をついで、日々信仰の道にまい進したいと思っております。皆様どうぞ宜しくお願い致します。(2013.7)

金沢文庫教会 56 年の歩みを 感謝して



犬塚 志朗

私が大学卒業の年、就職活動として、キリスト教系の中学校・高等学校での教師として働くことを希望していました。東京の基督教教育同盟より、関東学院六浦中学・高等学校を紹介されて、遠路はるばる、愛知県の片田舎の自宅から 300 km の道程を汽車、電車を乗り継いで面接会場に辿り着いて出会ったのが当時の校長、教頭、そして若き日の白根宗教主任(牧師)でした。

1966 年の 4 月より、周辺は全く未知で知人のいない、孤独の状態で学校に勤務し、そして教会を探し始めました。しばらく近くの教会に通いましたが、そのうちに白根宗教主任より誘われて寺前のご自分の自宅を開放しての伝道所に通うようになり、現在に至っています。白根牧師夫妻には私の結婚式とその会場探し、司式、奏楽、そしてその後の家庭問題、聖書研究に至るまでずいぶんお世話になりました。

牧師先生の自宅を開放しての伝道所・祈りの家で、私はしばらく、十数名の小・中学生の教会学校 (CS) のお手伝いをさせてもらいました。CS の生徒と一緒に、公園、海岸、スケート場にでかけたものです。クリスマス、イースターの行事には、牧師夫人の手料理が振舞われ、特に鮭や明太子の混ぜご飯、野菜サラダは独身時代の私には美味しさが身に染みしました。その時 CS 教師として出会ったのが、関東学院の三名の神学生、短大勤務の方、関東学院六浦の卒業生たち、みんな若さいっぱい、はちきれそうで、恋多き私の青春時代に大きな影響を与えました。

その後ずいぶんたくさん教会を訪問しました。フランスのノートルダム寺院(身体中に振動してくるパイプオルガンの音色)、英国のケンブリッジ、キングズ・カレッジの音楽礼拝(観光客を排除しての世界的有名な礼拝)、英国の Trinity Church (三位一体) 教会、米国の黒人の人たちの南部バプテスト教会、シアトルのカトリック教会、ワシントン州の片田舎で 1 か月、生徒を引率して、聖公会の神父さんのところにホームステイしながらの主日礼拝や水曜日のポトラックランチ、日本では横浜山手の International Church 等は国際色豊かで一生の思い出です。

ずいぶん多くの教会で、それぞれの特徴を学ぶことができました。私は古希を迎え、社会的公けの仕事から離れました。過去に訪れた多くの教会での観光客的な気持ちを捨てて、白根牧師より繰り返し教わった「神対自分に徹すること」、「忍耐強く従順であること」、「忠実であれ」を目標に、残りの人生を過ごそうと思うようになりました。自分に与えられた才能を生かして、脇で教会を支えることができるのを望んでいます。

文庫教会 56 年の歩みと白根牧師の卒寿のお祝いを感謝し、主イエス・キリストにあって神様の導きと祝福を祈ります。

56年のお導きに感謝

倉 禎一



金沢文庫教会が産声をあげ、56年を迎えられたとのこと、主のこのお導きに感謝、お悦び申し上げます。

また今日までこの教会を牧会されてこられた白根先生には、感慨無量のこととお察しいたします。「継続は力なり」といいますが、56年続けてこられた先生の御業が、正にこの言葉を物語っていると思います。そして何よりも聖霊が常にこの教会に注がれていたことを私は信じます。

実は、白根先生との出会いは、私が中学2年の頃でしたか、教会を建てるための古新聞回収とかで、先生はよく我が家に来られ、たまさか我が家の祖母が用意した即席ラーメンを美味そうにすすって、如何にも庶民的な先生と私は思いました。

私は、1985年に結婚し、先生にその媒酌の労をとっていただきましたが、これを境に主の枝としてのお交わりが深まったことは無論ですが、私にとっては、今もなお親父のような温か〜い先生です。

こんな私ですが最近、当教会の子どもたちに二カ月に一回位かな？説教奉仕をさせていただいております。子供たちは純真で可愛いですね。「イエス様の愛のお言葉」を子どもたちに取り次ぐことに必死です。主が力づけて下さると信じて……。

この先、金沢文庫教会が主に結ばれてさらなる信仰の業を宣べ伝え、広げていくことができますように。そして、白根牧師の上に主のお力と、癒しの御手がその都度増し加えられることを信じ、ただひたすら祈りながら、拙い文を閉じさせていただきます。

「祝」 文庫教会 56 年記念 神様と牧師と私の仲

倉 薫



白根牧師は

「私は、日本バプテスト同盟金沢文庫教会を代表して、この教会が、今、バプテスト同盟に属する教会として設立されたことを宣言します。教会の『かしら』は、イエス・キリストであり、教会はひたすら福音の宣教に励まねばなりません。どうか、我らの主イエス・キリストの恵みと、聖霊の豊かな働きとによって、教会の使命と目的が達成されますように。
*教会は、キリストの体であり、全てにおいて、すべてを満たしている方の満ちておられる場です。」

との思いを持たれて、並々ならぬ努力をされ、多くの教会員と、牧師の知人、友人のお支えを頂いて、創立された教会が、56年を迎えようとしています。白根牧師が、神に向きあった祈りは

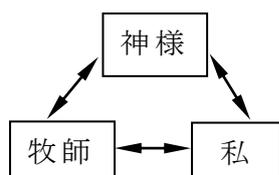
「教会の『かしら』なる主イエス・キリストの父なる神よ、あなたの、計り知ることのできない恵みによって、今、この地にいる兄弟姉妹がここに集められたことを感謝いたします。どうか、聖霊を豊かに注ぎ、教会の創立記念にふさわしい時となるよう守り導いて下さい。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン」

このように祈りつつ、56年間牧会し、教会と教会員を支えてこられました。一つ一つの事柄に「真摯」に向き合い、ともすれば、心が折れそうな時でも、神様と奥様(清子夫人)に支えられ、乗り越えてこられました。56年、そんな牧師としての働きを見てきました。

私が牧師と神様に会ったのは、両親が、横須賀の大作町に住んでいて、父は自衛官、母は日本キリスト教団田浦教会の会員で、私は3歳の時、キリスト教社会館の中にある保育施設で3年保育、母に連れられて田浦教会のCS幼稚科に通っていました。田浦教会のCSから清水が丘教会へ、CSから高校生会へ、その時牧師が、今は亡き倉持芳雄先生。1996年イースターに、神様からの「お前は私の子、いつまでも私を見上げて歩きなさい」との呼びかけに応え、バプテスマを受けました。

その時、関東学院六浦の教師をされていた白根牧師は、教会建設のために、古新聞の回収、リンゴ、サツマイモなどの販売をしながら、車で走ってしまし

た。私の実家（保土ヶ谷区）へも「白根です」と笑顔でよく訪れ、玄関でお祈りをしては奥様のお待ちになる家へお帰りになっていました。時には私も、牧師の車で白根貞夫兄の家へ古新聞の回収のお手伝いに行かせて頂きました。私が保育専門の学生だった時も、学校のクリスマス礼拝の説教者として来られ、私の奏樂で礼拝を守り、賛美歌を歌われました。その後白根牧師が理事をしている知的障害者の施設で私は音楽療法士として3年間働きました。その時「薫ちゃん、素敵な青年がいるから一度会って見ないか？」と誘われ、牧師宅へ急行するとそこには奥様の笑顔と優しさ、温かいご夫婦の姿がありました。私達も10年の空白があり、再度牧師の教会へ、礼拝を守り、お茶を頂いたとき、白根牧師の一言「結婚するんだろ！」神様と白根牧師が重なり、「え～」でもなく「しません」でもなく、「はい」と答えました。私達二人をよく知っている白根牧師の仲人で、婚約式、結婚式、そんな私達にも「こんなはずではなかった!!」との危機感がありました。その度に白根牧師も神様も知らん顔。「うちにはゲストルームがあるから、泊まっていくか？」この一言が、白根牧師の優しさだったと、今は思います。あれから25年の月日が流れ、娘二人はそれぞれの路を歩んでいます。私達二人も60歳を過ぎ、だんだん白根牧師が仲人をして下さった年齢になりました。神は私を招き、何か牧師の手助けができないかと、私を文庫教会に遣わされ、神様に派遣された一人の教会員(日本基督教団横須賀小川町教会員)であり、文庫教会では客員です。しかし神様は、どこの教会員であっても、私を見上げ、遣わされたところで奉仕をし、そこの教会の助手として働きなさい」とお命じになります。



神は白根牧師を通して私に手助けしてほしいことを神の名によって、私をお呼びになりますし、私は、神様の名によって応えていかなければなりません。神様からの召命は「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことに感謝しなさい」とのみ言葉です。それゆえに、奉仕をする恵みを喜びとし牧師の健康と働きのために祈り、文庫教会の皆様とのお交わりに感謝をしつつ・・・、お祝い申しあげます。

白根先生！ 創立から56年の歩み、おめでとうございます。これからは、ご自身の健康を十分に注意され、さらなる牧会の路をあゆまれますように、いつでもお手伝いしますよ！ 薫より

日々主に守られている恵み

白井 豊子



文庫教会 56 周年おめでとうございます。

私は仙台の教会から結婚により、文庫教会に転会しました。あれから 30 年余り経ちます。主によって守られ、白根牧師をはじめとする主にある兄弟姉妹との交わりによって励まされ、今があることを感謝いたします。

私自身の最近のでき事から学ばされたことを次に記します。

それは昨年 7 月 22 日、日曜の夜 9 時半頃のでき事でした。週末には横浜に行くのだからと、一挙に休むことなく家事に取りこんでいました。たまった洗濯干しを一旦終えたものの二枚だけタオルが残っていることに気づき、再度やり始めた時です。思いもよらず踏台ごと転倒、必死で右手で戸口を押さえ身体を支えていました。強い痛みを伴い、ぐんにやり曲がった異様な形の右手が目の前にありました。救急車で運ばれ、翌日ギブスで固定してもらいました。整復した後、医師は「これはいい骨折だ」と語ったので、私は気をよくし、たいしたことないんだと思ってしまいました。

17 日後の 8 月 8 日、二回目の診察で医師から「悪くなっている、これは粉碎骨折で動きやすいもの」と言われて驚きました。

三回目の 8 月 20 日の診察では「一層悪くなっている。このまま進めるか、手術するか決めなければいけない」と言われて困りました。別の病院で相談したところ、このまま進めた方がよいと助言を受け、9 月 4 日まで計一か月半のギブス生活を過ごしました。

右手が使えないので左手が急遽主役になりました。例えば包丁で野菜を切るのには右手の代わりに棒をさして押さえ、左手でナタの如くに切っていました。洗濯物を干すにも片手では難しく、押さえる手がないと干しにくいのです。ビンの蓋を開けたり、インスタント食品の袋を開封したりするにも片手では難しく両手の意味を強く感じさせられました。

動ける手と支える手との両方があって、一つの動きが生じる、支えがあって動けているのだと強く感じさせられたのです。

ギブスを外したら、ソーセージの様に浮腫んだ右手のリハビリが大変でした。整骨院と病院との両方に交互に通い続け、それは三月末まで続けました。手を握れるようになるために一本ずつ指の関節を動かすのを百回余り一度に行った

りしました。針金が入っているような感覚でした。いつになったら普通の生活に戻れるのだろうかと思うこともありました。リハビリの専門の方々の支援で励まされ取り組むことができました。「リハビリをしないとこれまでできていた動きを脳が忘れてしまうのです。一つ一つ思い起こさせるのがリハビリです」と聞いて驚きました。

人間の体は神様がくださった最高の作品と思われました。あたり前にできていたことが一度ストップさせられると、回復するにはどんなに大変かを知り、あたり前の日常は、恵みの内にあることなのだと強く感じました。

リハビリは障害児教育にも似ていました。行きつ戻りつで微妙に進歩していき、いつの間にか目標に辿り着くのは共通していました。

私の右手は十度曲がったまま固定しましたが、なんとか使えるようになり、書くのもできています。100%戻ることはないとのことですが、疲れやすさを左手でカバーすれば何とかできます。感謝です。けがや病を通して

「欲ばらず、いい加減に、平穏に生きる大切さ」をつくづく思いました。日々主によって守られていることを、恵みの内にあることを学ばされています。

文庫教会の発展と、白根牧師をはじめ皆様のご健康とご活躍とをお祈りいたします。

神の家族

高井 幾世



金沢文庫教会で神の家族の端に加えられ、今日まで主に守られて過ごすことができましたことを深く感謝申し上げます。

「主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われます。」
(使徒言行録 16 : 13)

夫の転勤で千葉から横浜に移り住んで 26 年、白根先生を始め、多くの兄弟姉妹に支えられて参りました。引っ越してきた当初は身重で知人はひとりもおらずとても心細い状況でしたが、教会の方々に本当に温かく迎えられ、いろいろ教えていただきました。お蔭でその年の 6 月に無事次男が生まれ、幼児祝福式をしていただきました。人見知りの強い子でしたが、なぜか礼拝堂や家庭集會では明るい笑顔だったことを思い出します。沖縄伝道旅行にも連れて行って

いただき、兄弟ともに皆さんにかわいがっていただきました。夫が単身赴任で父親不在の難しい時期、我が家で開かれた祈祷会では、いつもと違い背筋を伸ばして座っている子供たちの姿がありました。長男は関東学院六浦中学校に進み、高校二年生のクリスマスに受洗の恵みに与りました。主が道を備えて下さったことを覚え感謝します。これまで幾度となく途方に暮れることがありましたが、その都度教会の方たちに助けられ、二人の息子も今社会人となることができました。

私は千葉にいる頃から自宅で英語を教えていましたが、下の息子が中学に入る頃、幸いにも教員の仕事に就くことができました。今の職場が与えられたのも神の不思議な御計らいによるものです。また教会員の方の励ましがなければ、30歳後半になって通信で教員免許を取ることもなかったでしょう。試行錯誤を重ねつつ、自分の力不足に悩みつつも、なんとか15年近く続けることができました。定年まであと僅かとなりましたが、与えられた勤めが果たせるようにと願っております。

一昨年より今まで離れて暮らしていた母も同居できるようになりました。長年お世話になった姫路福音教会から文庫教会に転会させていただき、本当に喜んでおります。もうほとんど寝たきりですが、先生や皆さんが訪ねてくださり感謝しております。今は有難いことに夫が家にいていろいろと面倒をみてくれています。夫も八年前、心筋梗塞でバイパス手術を受けた時は、皆様の貴いお祈りに支えられて今を生かされております。

振り返って一つ一つの事を考えますと、神の恵みを数えずにはおれません。主はまことに小さき者をも顧みてくださり、私たち家族一人ひとりをお守りくださいました。

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。」(ヨハネ 15:5)

これからも主の枝に連なり、文庫教会の皆様と共に信仰を持って歩めますようお祈りいたしております。



白根先生の歩みは無量大

中川澄子



白根先生、有難うございます。五十年の間には白根先生のお説教と故清子先生とのお交わりのうちに信仰生活を知り、今全国の教会で牧師、伝道師として御活躍中の大勢の先生方の顔とお名前が浮かんできます。懐かしくなり、子供みたいに指を広げ数えてみましたらびっくり、十本の指では足りませんでした。白根先生の蒔かれた種は、今も各地で大輪の花と咲き、日々刻々と無量大に広がっています。

今年九十歳になられる白根先生のお説教は噴火山の赤い炎のようです。凄いです。私たちの心に迫ってきます。感謝です。神様も喜んでいらっしゃると思います。白根先生は私たちの知らない道でたくさんのご苦勞がお有りだったことと思いますが、賜り物の健康とほほえみと力強いあのお声は、神様からのスペシャル・プレゼントと確信します。感謝です。感謝です。

神様、白根先生をお支え、感謝です。

釜利谷に移り住んで1年半後、やっと家に電話が設置されました。昭和47年春頃です。電話帳で教会を捜し、子供（小6、中2）と私と三人で歩いて教会に行きました。当時バスは駅から赤坂、坂本、白山道方面に行き、教会のある夏山・野村には歩くしかなかった時代です。私は礼拝堂に入ると感動して涙が出て泣き声まで出てきてしまい、子供たちは「お母さんと教会に行くのは恥ずかしいから嫌だ」といつもいわれていました。同年秋より私は勤めに出ることになりました。日曜日は全く休みがとれませんでした。しばらくして白根先生が私の家で祈禱会をして下さいました。5~6年続けて下さり、道を示し、心を育てて下さいました。感謝でした。その頃白根先生、川又先生、犬塚先生その他の皆様も、昼間働き夜は祈禱会等、教会活動を力強くして下さい感謝でした。祈禱会は牧師宅、大井先生宅、中山先生宅、高山兄宅、小倉姉宅、岡田兄宅、私の家などを月1回まわっていたようです。

その頃クリスマス・イブのキャロリングは磯子、洋光台、港南台、横須賀と回って、いつも最後はお花屋さん(根本さん宅)の店頭で、花の香りに包まれて、お祈りと賛美歌を唄います。駅のそばなので、電車が着く度に人々が覗きながら通って行きました。賛美歌を耳にしてイエス様を思い出した人も大勢いらしたと思います。

感動の説教、感謝です。

題「私には夢がある」 2008.1.6 白根先生

まったく希み得ない時でも希みをもちなさい。キリストにおいて、どんなときも救われる。駄目はない。変わらなくても過ぎてみて、振り返ると恵まれていることに気づく。

感謝です。

題「一枚の絵の為に」 2004.5.9 大井牧師

高価な一枚の絵のためにすべてを捨てて得たが、それが宝物か。宝はイエス・キリスト中心の日々か。この世の中の忙しさが中心か。イエスは脇に置き時々思い出す生活？主は忍耐して待ってられる。後ではない今、主中心の生活設計に変えよう。感謝です

題「召命と献身」 2006.1.22 張 牧師

声を出して祈った。心という耳が神の声を受けた。自分の考えではない。なにごとをするにも人に対するのではなく、神にすることです。主イエス・キリストに支えられ、万事が良きように導かれる。祈りの中に召命と献身の確信。望み得ないのに信じて行こう。神からのたくさんの賜物をすべて活用した姿に感動しました。感謝です。

題「葉っぱのフレディの生と死」 2003.1.12 中山先生

神の設計図。フレディは木の葉だけど人のために生きることが仕事で、夏は日陰をつくり、風を送り、秋には紅葉して人々を楽しませる。冬が来る前に落葉することで死を教えている神の摂理。与えるも取り去るも神の御心。人は死んだあと、新生活がある。新しい住まいを作り、迎えて下さるのがイエス・キリスト。感謝です。

題「自分を好きになる」 1993.2.24 新垣 勉牧師(テノール歌手)

賛美歌です。試みに遇わせ、鍛え給う主を感謝します。聞いているだけでぐいぐい、心が震えます。求めているときはスポンジが水を吸うごとく生きる。自分を変え古い自分を捨てる。主イエスが見える世界を生き感謝しよう。感謝です。

題「ペテロの岩の信仰」 1993.2.20 志賀先生

信仰は神から与えられる。素直に受け入れることが信仰。神が準備して下さった道を、恵みを、時間を、感謝して使いましょ。神の愛を他の人に伝えなさい。神は私たちに機会を託している。私たちがどこにいても、どんな時でも主は共にいて下さる。感謝です。

才木先生、北條先生、高山先生、ロバート・フロップ先生、秋葉先生、高桑先生、佐々木先生、ターリー先生ご夫妻、ブレドモア先生、江戸先生、浅海先生、帆苺先生、野口先生、名護先生、丹野先生、長谷川先生、森先生、澤野先生、ギデオンの諸先生、皆様のお声が聞こえてきます。感謝です。

神様のみ心が世界中に根付きますように。

白根牧師と私

中 本 勉



大阪の自宅から横浜の当教会へ、月1回礼拝に参加、16年間継続できたことは大変な恵みに与ったものである。そしてそこに至る道筋がまた主の導きと言おうか、不思議千万である。

話は遡るが、私が16歳の時、彼18歳生粋の浜っ子が隣の席で授業を受けている。その彼が後の白根牧師であろうとは誰が予想し得たであろうか。

大阪生まれの大阪弁、どこがどう好きであったのか二人は忽ちにして親友となり、関西学院神学部での勉学は続いたが無論戦前戦中の事、共に兵役の義務あり、更に二年違いの年齢故に彼が先に陸軍に従軍、私は二年後れて海軍へ、昭和20年8月15日敗戦、武器を棄てて8月下旬に帰阪。彼の方は外地からの引き揚げに相当の月日を要した。当時日本男子の兵役義務による悲劇は数多く伝えられているが、私たちは無事生還でき感謝したものであった。戦中は当局による迫害に会い、神学部は縮小から廃部へと追いやられ、我々若者は為す術も無かった。加えて熱心に牧会中の牧師さん達が特別高等警察や憲兵らによって「天皇とキリストはどちらが上か!!」と詰問、即答を迫られた。牧師さん達も負けじとゲートルを脚に捲き、軍靴を履いて軍国主義に殉じる構えを執っておられたものだった。因みに仲良しの二人も戦争によって引き裂かれ、ようやくにして終戦。でも中々再会し得ない。しかも飲食に事欠く食糧難時代は可成り長期間続き、野草を摘んでは腹を充たし、塩もなく遠方の海岸から海水を瓶に持ち帰っては澄まし汁の味付けをした。そうこうする中に天は『ララ物資』という「マナ」を降らせ給い、一斗缶に乾燥キャベツが一杯詰まったものを下さった。私たちは感激に涙しつつ飢えを凌いで貪り喰った。さて白根牧師の引き揚げ後、互いの消息が不明という時、大阪の、とある教会の牧師さんに依頼し金沢文庫教会を教えて頂き、その脚ですぐ駆けつけ当教会での礼拝が16年前のクリスマス礼拝であったという訳である。

感 謝

根 岸 千 恵 子



私には幼い頃に母に手をひかれ、教会へ通った思い出があります。牧師先生の奥様はいつも私の頭を撫でて下さいました。木曜日の夜は先生と奥様が自転車で隣町から我が家に家庭集会に来て下さり、私たちも眠いののに座っていたのを覚えています。今にして思えば、大変なご苦勞であったと思うのですが、しかし感謝なことでした。

「神様は居られるんよ。悪いことしたら駄目っ!!」あんなに立派で優しい人が嘘をつくはずがない。

これが純粋な母の信仰でした。やや酒乱気味の父のもとに嫁ぎ、さほど幸せではなかったろうと思われる母の人生でしたが、晩年は軽い痴呆となり、「お父さん、お父さん！」と言いながら、常に父の側におり、そんな母を父も愛しんでいました。

父が亡くなって二年後母も天国に召されました。病気をあまりすることも無く、子供のそばでの穏やかな死でした。

その後長い間私は教会から遠ざかっていましたが、いつも教会の十字架を見ると懐かしく思っていました。そして 2009 年に白根牧師より洗礼を授かりました。幼い信仰ですがイエスを避けどころと信じる祈りの内に心が安らぎます。母の好きだった賛美歌をよく歌います。

人間は様々なものを発見し作り出しますが、初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。 この世のすべてのものは神が初めに創られた。

「この真実、揺らぐことのない信仰へお導き下さい！」と祈るばかりです。そして私を捜して下さった神様に心より感謝いたします。

救いにあずかって

橋本登美子



「主イエスを信ぜよ、さらば汝も汝の家族も救われん。」使徒言行録 16 : 31

それは昭和26年のことでした。二子玉川に居を移してまもなくの頃、夫が蔵書の中から一冊の聖書を取り出し、「散歩に出たら、すぐ近くに教会があった。行って見たらどうか」と申しました。

今思いますと本当に不思議なのですが、それまでキリスト教と全く無縁だったにもかかわらず、私は何の躊躇いもなく、次の日曜日生後7か月の幼い息子を抱き、夫が学生時代に読んだというその聖書を持って、夫が見つめてきたインマヌエル高津教会の礼拝に出席したのです。そのまま私は殆ど休むことなく礼拝に出席、翌年には受洗という恵に与りました。

その二子玉川の我が家へ私の三人の妹たちが故郷である岡山から次々と訪ねて来ました。妹が来ますと私は自然にインマヌエル教会の礼拝に妹を連れて行くようになりました。妹たちも何の迷いもなく私に同行し、岡山に戻ってから地元の教会で礼拝出席を重ね、まもなく三人揃って受洗しました。しかもその中の二人はその後聖職者の道を選び、現在も一人は牧師として、一人は牧師夫人として国の内外で福音を伝えています。残る一人は医療伝道団に所属し現在もキリスト教系病院・施設の副理事長として病める人々に寄り添う日々を過ごしています。妹達の受洗後、母も導かれて受洗し、4年前101歳で天に召されました。

さて、私共母娘にキリスト者となる切っ掛けを与えてくれた夫ですが、なぜか救いに与ることのないまま歳月が流れました。しかし神様は夫の事を決してお忘れではありませんでした。それは臨終の床で明らかとなりました。中山将太郎先生御夫妻が立ち会って下さり、白根新治牧師がバプテスマを授けて下さったのです。外では激しい雨が降っていました。夫は微かでしたが確かに頷き、そして翌日早朝安らかな表情で天に召されてゆきました。もう12年前のことになりますが、今でもこの時のことははっきりと思い浮かび、感謝で胸が熱くなります。

私も傘寿を過ぎ二子玉川を離れて随分と年月が経ちました。金沢文庫教会の会員の一人として長くお世話になっていますが、一冊の夫の聖書からご近所の方を含めて、何人もの人が短期間に救いに導かれたことは今でも不思議で「神様が奇蹟を起こされた！」としか言いようがないと当時を思い出すたびに考えています。

それに致しましても、この後神様はあのような不思議をもう一度私に見せて下さるでしょうか。 限りない感謝をこめて。

クリスチャンの 小さな継承

松田みちよ



横浜大空襲があった終戦の年、それまで恵まれた環境下にあった私は、一面の焼け野原の中、神奈川の地で家族八人のバラック生活をしていました。そこで中学の進路を決めることになったのです。母は私に、女の子は将来どこへ嫁ぐとも何かと苦労があると思うので、中学校はミッション・スクールへ行き、神様の愛の教育を受け、強く生き抜けるように捜真女学校へ行きなさい、と勧め、私も決断しました。思い返せば母は娘の頃から、一人の信仰深いクリスチャンの田中さんに出会い、いつも、「キーチャン(母の名はキク)、日曜日だから教会へ行きましょう」と誘われて、毎週楽しみに教会に行っていたのです。そこでミスカバース先生のお話を聞き、「先生はとても厳しいお方だけど立派な教育者よ！」と、捜真女学校へと勧めてくれたのです。

そして4月の入学式には、「捜真の字のごとく六年のうちに真理をしっかりと捜し求めて卒業してくださいネ」とのお話がありました。その六年後の夏の修養会が御殿場で行われ、バプテスマを受ける決心をし、両親にも話しました。

信仰告白の時も、今は亡き森島卯之助先生より「あなたは、そのままのあなたを神様に捧げれば良いのです、何も心配することはありません」と、励まされ、昭和26年12月23日のクリスマスに、千葉 勇牧師より受洗しました。(当日は外庭のコンクリートの深い防火用水で受洗したのです。)

卒業後、久保田百合子先生が我が家を訪ねて下さり、「千葉先生の推薦で、東白楽のニューライフ幼稚園へ行かない？」と勧められ、一緒に連れて行って下さいました。そこで14年間、幼児教育に携わることとなったのです。その頃母はよく私から口写しで賛美歌を教わり、「賛美歌はいいわね」といいながら昔の礼拝のことを思い出していたようです。また花の大好きな母は、毎日お米の研ぎ汁を花にかけに行き、小さな草花に言葉をかけ、成長が楽しみだったようです。振り返ると神様はこのように日々豊かな恵みを私たちに贈り続けて下さっていたことを今感謝しています。

今年は文庫教会の56周年ですが、私が初めて教会に伺ったのは結婚後数年してのことです。私の甲状腺癌の手術後から始まり、母と主人の相次ぐ死も、日常生活の苦しい時も信仰により力づけられ、光を見出し、心静かに過ごすこ

とができました。これは長い教会生活で成長が見られたこと、主イエスの備えられた道に心身を委ねてきた私に、神様自ら救いの手を差し伸べて下さったことを実感し、感謝しております。イエス様の死は全世界の人を神のもとへと救って下さったように、私たち一人ひとりがクリスチャンとして何らかの小さな贈り物を次の世代に残し、イエスの証し人となり、行き詰った時でも先輩で亡くなられた方を偲びつつ、再び原点に戻るような小さな後継者になりたいと思っております。また神様は一人だに滅びる人がいないように備えて下さいました。私たちが活動できるようにと陰（かげ）で多くの方々が支えて下さっていることも忘れてはいけないと思います。

神の栄光が永遠に！

古新聞は見えていた!!

村田 眞



金沢文庫教会 56 周年、おめでとうございます。56 年前、白根牧師はご自宅を開放され、聖日礼拝を守っておられました。

白根牧師は単独で、学校関係、教会関係の各家庭等を訪問され、古新聞を譲り受け、それを会堂建設の一部資金とされ、日夜努力しておられました。そして横浜市金沢区釜利谷西の閑静な住宅地に現在の金沢文庫教会を献堂なさいました。教会設立と共に徐々に教会員が増えてゆき、私も及ばずながら一会員として協力させて頂きました。

一言で 56 年と申しますが、白根牧師の牧会活動には、只々脱帽の想いでいっぱいです。

白根牧師も卒寿を迎えようとしておられますが、健康と今後の一層の発展を祈りつつ、この教会に対する神の啓示と恩寵を深く信じます。

誠におめでとうございます。

母のこと

松山謙五



私の母の家系は、キリスト教に縁の深い家系だったようである。母は父との結婚式を、当時自身が通っていた上海の教会で挙げている。函館のミッション・スクール出身だった母は父(私の祖父)と夫(私の父)の転勤、そして戦争により、海外・国内の方々を回って最後に横浜の菊名に落ち着いた。その菊名の家に時々東京近郊の、かつてのミッション・スクールの同級生が集まり、讃美歌を歌ったり、食事をしたりして楽しく賑やかにしていたことを私は覚えている。

今年の6月、母の兄の子供である83歳の従姉を川崎の老人ホームに訪ねたが、私の母に讃美歌をたくさん教わったと懐かしそうに話してくれた。3年前に彼女の姉である従姉が亡くなった時、弟である従兄も加わって讃美歌「主よ、みもとに」をうたって見送った。その際従兄が母の兄である従兄姉たちの父親もクリスチャンであったこと、幼い頃からよく家族で讃美歌をうたったことなどを話してくれた。

今年81歳になるその従兄の案内で、東京谷中の母の実家の墓を訪ねた。キリスト教徒の墓地は広い谷中の墓地の端の一番奥にあった。従兄は墓前で私の妻の父(大島波浮教会員であった)の愛唱讃美歌「山路越えて」を張りのある大きな声でうたってくれたが、自分には信仰はないとのことだった。

その母の実家の墓の隣りは空地であったが、それは母の叔父宮部金吾(内村鑑三と共に札幌農学校の2期生)のもので、札幌へ行くので使ってくれとのことだったが、今もそのままになっている。

この数日後、私は妻と共に日本で2番目に古いという「北海道大学植物園」を訪ねた。この植物園の初代園長であり母の叔父である宮部金吾を記念した「宮部金吾記念館」を見学するためである。

館の中には、内村鑑三との書簡が驚くほど多く展示されていたが、その大部分は英文によるものであった。大きなケース1つ分はあろうかと思われる書簡の中に「50年の付き合いの中で、君とだけは一度も喧嘩をしなかった」と書かれた内村からのものがあり、宮部の温厚な人柄が偲ばれたが、その人柄は姪である今は亡き母にも共通していたことを妻に指摘されてしばし感慨にふけたのだった。

母が遺した言葉に

「困っている人が居ても、自分が転んでしまう程助けてはいけない」

「転んでいる人を、蹴飛ばすようなことはいけない」がある。

生きていく上の指針にしたいと思っている。

金沢文庫教会と 私ども家族の 20 年

森 敬子



金沢文庫教会創立 56 周年おめでとうございます。

私が初めて金沢文庫教会に参りましたのは、もう 20 年以上前の 1991 年のことです。その頃教会には宣教師がいらして、バイブル・クラスがあったことを覚えております。同年 6 月 8 日に教会で婚約式をして頂き、同年 11 月 9 日に結婚、その後子供が生まれる迄の間、奏楽奉仕をさせていただいたこともありました。その後は埼玉県で次男が生まれ、二人とも白根先生に幼児祝福式をして頂きました。宇都宮赴任中、結婚 10 周年を迎えた頃には、大晦日に私と主人の両方の母に会い、山下公園の除夜の汽笛を聞きながら中華街で年越しそばを食べ、新年元旦の日に教会を訪れ、記念撮影をして頂いた事もありました。

その後 2004 年からアメリカ・オハイオに家族で駐在し、結婚 15 周年を迎えたのもこの時です。さらに 2010 年、主人一彦が中国・上海の名園、豫園(よえん)等を案内しました。

そして、昨年 11 月 16 日に、母・菊池孝子が召天しました。あまりに突然のできごとに今でも信じられない思いです。去る 5 月 12 日の母の日に行いました久里浜霊園での納骨式では、恵まれた天候のもと、父・菊池敏員の隣に納骨することができました。金沢文庫教会からは、白根先生と御一緒に久保田さんがいらして下さいました。

母はギリシャ正教信者の両親の下、幼児洗礼を受けていましたが、本人の意向によりプロテスタントに移りました。晩年は横須賀小川町教会の長老として、誠意を持って教会に従事しておりました。母が金沢文庫教会に英語を教えるために使っていた洋間の机を二つ献品したことを覚えています。

主人は今年の 4 月からタイのバンコクに転勤し、私も先日、荷物整理の応援をしながら 1 ヶ月ほど、行って参りました。夏休みには息子たちも訪れる予定です。

長男隆登(リュウト)(イザヤ 40 : 31)、次男は亘平(コウヘイ)(ヨハネ 20 : 19)です。どんな青年になるでしょうか。今の私ども夫婦は、子供たちの成長を見守ること、二人の孫を連れてキリスト教式で葬った隆登と亘平の祖父母の墓前礼拝を守ること、そのことを精一杯考えております。(箴言 : 17)

金沢文庫教会 56年記念誌 アンケート

1. 名前
2. バプテスマ 年月日 (受洗教会名)
3. 愛誦聖句
4. 愛唱賛美歌 A 賛美歌 B 賛美歌 21
5. 一言

写 真

1. 有馬亜都子
2. 1989年夏 (金沢文庫教会)
3. テサロニケの信徒への手紙一 5:16~18
「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。
どんなことにも感謝しなさい。」



4. B 465
5. 受洗させて頂きましてから、教会員の方々と親しくしていただきました日々も、昔の事のような時間が去り、お顔を思い出す方々も一人、二人と神様のもとに旅立たれ、思い出のみ残ること多く懐かしさに加え、私事にては、大切な姉、母も神様のもとに呼ばれました。教会の皆様を送られ、先立たれた教会員の方々と楽しい日々を母も姉も送っていると信じております。
白根先生の多大なお働きの文庫教会が、益々神様のお守りあることをお祈り申し上げます。

1. 有馬亜子
2. 1989年夏 (金沢文庫教会)
3. 創世記 28:15
「見よ、わたしはあなたと共にいる。あなたはどこに行ってもわたしはあなたを守り、必ずこの土地に連れて帰る。」



4. A 475
5. 「置かれて場所で咲きなさい」

昨年ベストセラーになった書籍が今夏の私の命の一冊でした。ノートルダム清心学園理事長渡辺和子先生の著書のこの一冊に出会ったのは現在私の勤めている学校の業務で知り合った方からの勧めでした。

人はどんな境遇でも輝ける。どんな状況でも咲く努力をする。どうしても咲けない時、その代わりに根を下へ下へ降ろして根を張る。信仰深く、強く、優しく、希望を持って生きるという言葉、私の今を強めてくれました。根をのばした先には必ず福音があると信じます。

1. 大井法子

2. 1962年4月（関東学院教会）

3. 箴言 17：27、同 12：18、イザヤ書 43：4

「口数を制する人は知識をわきまえた人、冷静な人には英知がある。」

「軽率なひと言が剣のように刺すこともある。知恵ある人の舌は癒す。」

「私の目にあなたは価高く貴い。」

4. B 522、496(3 節) 賛美歌 II 26（小さなかごに花を・・・）

5. いつも今日が最後の日と思い、恵みの数を数え、輝いて生活したいと思っています。

日ごとわがなす 愛のわざを ひとに知らさず かくしたまえ(賛美歌 496・3)



1. 島田澄子

5. 元気でいます。



1. 高井慶一郎

2. 2000年12月24日（金沢文庫教会）

3. イザヤ書 41：10

「恐れることはない。わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな。わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助け、わたしの救いの右の手であなたを支える。」

4. A 155

5. 小さい頃から、白根先生はじめ、金沢文庫教会の皆様には大変お世話にな



り有難うございます。関東学院六浦中学・高等学校で学び、高校二年の時、受洗の恵みにあずかりました。

信仰の薄い未熟者ですが、ここまで守られて過ごすことができ、感謝しております。会社勤めも今年で八年目を迎えます。東京での勤務が長く、今後は地方や海外に遣わされることになるかもしれませんが、どこにいても守ってくださる主を信じて歩んでいきたいと思ひます。これからもどうぞ宜しくお願い致します。

1. 中山明州

2. 1972年10月 (新潟教会)

3. ローマの信徒への手紙 12

「互いに思うことをひとつにし、高ぶった思いをいだかず、かえって低い者と交わるがよい。自分が知者だと思ひあがってはならない。」

4. A 3 1 2 (いつくしみ深き) B 2 7 1 (喜びはむねに)

5. 神の祝福に支えられ、文庫教会での礼拝に出席し、奉仕することもできました。感謝です。これからも神を中心とした信仰生活を送り続けられるよう祈って行きたいと思ひます。



1. 日高政恵

2. 1959年5月(京都キリスト教会)

3. 詩編 23 編

「光は暗闇の中で輝いている」(ヨハネ 1:5)

4. A 239 (さまよう人々)

5. 少し体調を崩していますが、私のような者でも生かして下さいます神を信じ、今後もその慈しみの中を歩ませていただきたいと切に願っています。



1. 星野浦男

2. 2009年4月12日 (金沢文庫教会)

3. ヨハネによる福音書 3:16

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得る



ためである。」

4. B 434、459

5. 来年(2014年4月)傘寿を迎える私ですが、毎週の主日礼拝に(時間の許す限り)出席して、主日礼拝を守っていますが、常に感じている事です、出席される皆さんの、いつも明るい表情、態度に接し、御言葉を学び、明日への大いなる活力を頂いて感謝の生活を送る幸いを頂いています。

1. 星野朋子

2. 2009年4月12日 (金沢文庫教会)

3. マタイによる福音書 6:25~34

「空の鳥を見るがよい。まくことも刈ることもせず……。」

4. B 404(あまつましみず)、459(飼い主わが主よ)

5. 2009年4月、金沢文庫教会において白根牧師より洗礼を受けさせて頂きましたことを心のよりどころとして、日々感謝の気持ちを忘れず、祈りを以って一筋の道をゆっくり歩みます。



1. 松山克子

2. 2002年10月18日 (金沢文庫教会)

3. 主の祈り

4. B 495 (しずけき祈り)

5. 子供の頃、父母に連れられ大島波浮教会に、1時間位歩いて行った。7人兄弟の中で、私一人が一番多く教会に行った。

— ただ一人野山を歩いている時でも神様は私の力です —

子供讚美歌だと思うが、ひとり遊びしながら歌っていた。その後社会人になってからも神様は心の中に住んでいて、何か事ある度に「神様、一生懸命考えて行動します。見ていて下さい」でした。文庫教会の一階に今も架かっている中山先生の『足あと』の絵に出会い、背負って下さったのだと実感！これからもずっと歩んでいけそうです。



1. 森清信子

2. 1991年3月30日 (金沢文庫教会)

3. ローマの信徒への手紙 10:13

「主の名を呼び求めるものはだれでも救われる」のです。



4. A 320、332、338 B 434、513、510

5. 主の聖名を賛美致します。

主の御恵みの下、白根牧師、役員の方々の多大な奉仕と努力により、創立56周年を迎えることができまして、お慶び申し上げます。ますます教会が信仰の礎となりますよう祈って居ります。

不信仰でなかなか出席できずに居りますが、生涯主の裳裾にしがみついていくつもりです。

1. 山林彩子

2. 1994年4月 (金沢文庫教会)

3. コリントの信徒への手紙一 10:13

「試練と共にそれに耐えられるよう逃れる道をも備えて下さいます。

4. A 312 (いつくしみ深き)

5. 神と出逢って心休まる思いですが、持ち続ける難しさを痛感しています。



1. 山林義弘

2. 1992年12月20日 (金沢文庫教会)

3. マルコによる福音書 13:30

「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない。」

4. A 66

5. 私は聖歌隊に加わったことから奉仕する道を歩むこととなりました。文庫教会の生活の中で、より広い所での働きを示されたものとして、生きていくあり方を一日一日追及しております。



召天者名簿

有馬 実枝姉	勝山喜久枝姉	光田 啓子姉
青木 露子姉	佐藤多嘉子姉	村島美佐男兄
市川 柚 姉	白根清子牧師夫人	八木 茂 兄
伊藤 禄 兄	中野富士乃姉	八木 貞子姉
江原 長人兄	根本 章子姉	山崎 徳治兄
江原みゆき姉	橋本 文雄兄	山崎 静子姉
岡田 ちゑ姉	藤井 昭子姉	矢野 みつ姉
大井 人協力牧師	林 真千子姉	吉田 初枝姉
川島伊久夫兄	福島 修二兄	
勝山 禄郎兄	福島 はる姉	



故大井 人 (元協力牧師) 説教ノートから

一枚の絵のために

聖書 (マタイ 13:44~46)

天の国は次のようにたとえられる。畑に宝が隠されている。見つけた人は、そのまま隠しておき、喜びながら帰り、持ち物をすっかり売り払って、その畑を買う。また、天の国は次のようにたとえられる。商人が良い真珠を探している。高価な真珠の一つ見つけると、出かけて行って持ち物をすっかり売り払い、それを買う。



この箇所は「天の国のたとえ」として書かれています。

この二つのたとえはユダヤ教の知恵文学の中にあって興味深く感じます。イエスはこのことをよくご存じであり、それを眼前にいる会衆に話すには真に理に適っています。ユダヤの知恵文学において知恵は宝にたとえられます。箴言 2:4,5「銀を求めるようにそれを尋ね、宝物を求めるようにそれを捜すならあなたは主を畏れることを悟り、神を知ることには到達するであろう。」 イザヤ 33:6「…知恵と知識は救いを豊かに与える。主を畏れることは宝である。」

また同時に真珠にもたとえられます。箴言 3:15「真珠より貴く、どのような財産も比べることはできない。」「知恵は真珠に優りどのような財宝も比べることはできない。」

イエスの時代の人々は宝を土中に隠しました。持ち主が死に、偶然発見されることもありましたが。ここでは、ある小作人がたまたま掘りあてます。それは彼の労働の成果で

はなく、誇り得る業績でもない。このたとえの中でイエスは、我々の生そのものに畑の収穫物とは全く別に、素晴らしい宝が隠されていることを教えています。それは畑で働いている農夫でさえ知らなかった宝です。農夫は大喜びでこの畑を入手するために、これまでの生活を支えていたものを一切手放してしまいます。生の根拠の転換といってもよいでしょう。なぜ畑を買うのか？なぜ、宝だけ掘って持ち帰ったり、そのままにしてそっと埋め戻して隠しておくことをしないのでしょうか？このたとえでは、宝は畑から離せないものであり、ここにこのたとえを理解する鍵があります。もう彼は小作人ではなく、自分の畑を耕す自立した人間になったのです。「真珠のたとえ」では、裕福な商人が一個の真珠を見つけるとそれを入手するために彼の蓄えた全財産を手放します。このところで大切なのは、①発見した真珠への驚きと、②入手するために一切を捨てる心にあります。古代では真珠は極めて貴重なもので、エジプトでは真珠を礼拝する程でした。

美術の評論家・中山公男氏が次のような経験をしたとのことでした。

「ある画廊に毎夕のように来て、ある絵を見入っている女性がいました。ある夕方、思いつめたようにその絵の値段を訊きましたが、およそ二千万円と知ると、彼女は青ざめて店を出て行きました。ところが数日後この女性は正式にその絵を購入したいと申し入れてきました。そこで画廊の主人は念のために彼女の調査をしたのです。彼女は二流の会社に勤め、年齢は三十歳近くで、地方出身で東京のアパートに一人暮らしをしています。どうしても二千万円の絵を買う人にはみえません。画廊の主人はどこからこれ程の大金を捻出できるか、と彼女に尋ねたところ、十年近く貯めた数百万円のお金、会社から退職金の前借り、保険の解約や親元から借金などをして、結局千数百万円もの大金を準備しました。彼女はこの絵を手に入れるために、これまでの生活設計を全面的に替えたというのです。画廊の主人は値引きして、彼女の注文した絵を売りました。

しかしこの話はこれで終わりません。彼女が買った絵が国際的に評価され出し、購入して数ヵ月後本国の画廊から、彼女の買った絵の値段に数百万円を上乗せして買い戻したい、との依頼があり、売った画廊がその交渉に当たりました。しかし、彼女は頑なに固辞したとのことでした。

彼女にとって必要なものは他にあるように思われます。自分のこれからの生活設計等もしっかりしていて、それをたった一枚の絵のためになぜ捨てたのでしょうか？まして多くの借金までして……。彼女は将来この絵が値上がりすることを見越していたのでしょうか。結果的にこの絵は評価が上がり高価なものになりました。しかし彼女はそんな目利きのプロではありません。普通なら数ヶ月で数百万円値上がったのだから手放してもよいはずですが。しかしその絵は彼女にとって何事にも替えることが出来ない大切なもの、魂の揺さぶりでした。

私たちはこの決断ができるのでしょうか。畑の宝や真珠が今私たちの前に置かれています。これは神の子イエス・キリストが苦しまれ、十字架上で人々の罪のために死なれ、復活され、今も共にいて下さるといふ宝です。この世のものばかり追い求めている私たちは何時全てを投げ出して、この福音に従うのでしょうか。主は忍耐強く待ち続けておられます。日々罪の中にいる私たちを愛して下さる方に献身するために、もう一度眼を御言葉に向けてみたいと思います。